
~ Cafeハイツへようこそ ! ~

choco (青い花)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「Cafeハイツへようこそ！」

【Zコード】

Z0387Q

【作者名】

choco（青い花）

【あらすじ】

あたしは4月からひとり暮らしする為の部屋を探していた。大学近くの街に足を運んで、毎日探索するとある道路前を通る。その先にハイツと共にあるCafeが視界に飛び込んできた。Cafeのあるとっても素敵なハイツが気に入ったあたしは、速攻で入居を決めたの。

ハイツ住人たちと趣味でCafe経営する大家さんとあたしのんびりでほのぼの、時に切なくも愛おしい日々。そんなあたした

ちのCafeハイツを一度のぞきにきて下さい。

1 / 13 第10杯? 20時更新予定。

第1杯 新生活はじめました。（前書き）

書き始めなので、内容などが修正入るかもしれません。
復帰はじめで文章が乱れているかもですが、
そこはご愛嬌という事で（笑）

第1杯　？ 13日23時更新予約

第1杯 新生活はじめました。

あたしは大学合格と同時に何ヶ月も4月からひとり暮らしする為の部屋を、大学近くの街で探していた。

そんなある日、突然 それは目の前に現れるのだった。

小さな道路前を横切ろうとした時、あたしの視界にCafeを設けているハイツが、とび込んでくる。

その素敵な雰囲気が気に入ったあたしは、すぐに物件があるかを、街の賃貸ショップに問い合わせた。

まだ空き部屋がある、とショップの担当者に聞いて即決で住むことを決めたのだ。

それがあたしの新生活の始まりになった。

大学を終えて、まっすぐに帰ってきたあたしは、部屋で講義の復習を踏まえ、ノートにわかりやすく今日学習した事をまとめていた。ふと、視線が静かな部屋に向く。

自分以外誰も居ない部屋。あるのは実家から出る時に持つて来た家具だけ。

当たり前だけど、この部屋からは人が話す声、テレビの声などが聞こえない。

急に実家のにぎやかさを思い出し、急にさびしくなる。

そんな静かな雰囲気にいたたまれなくなり、あたしは部屋を出るのだった。

部屋があるのはハイツの3階部分。

3階は女性しか住んでないし、男子禁制もある。それにドア前の廊下を進んで階下に続く前の階段には約4メートル程の鉄柵。

鉄柵には「丁寧にも頑丈そうな錠が取り付けてある。

それを見て思い出す あたしがこのハイツに住む前に賃貸ショッピングで説明された事を。

「えーと、それではですね、宮野董子さま」契約前にこの確認ですが、こちらの物件はまずおひとりで住まれる事。異性の出入は禁止である事。住人同士の恋愛は禁止である事を条件にお貸しさせて頂いております。その点を」「了承頂いてのご契約でよろしかつたでしょうか?」

田の前にいるショッピングの店員があたしに最後の契約の確認をする。こっやかに答えるあたし。

「はい、大丈夫だと思います」
「では、最後こちらにご捺印お願い致します」
「あつはー」

店員に促がされたあたしはテーブルにある契約の書類に判をおす。それからハンコに付着した朱色のインキを拭いて、鞄になおしながら、あたしは鍵の事をたずねる。

「部屋の鍵はいつ取りにくればいいですか?」

「ご入金を確認致しましたら、部屋の鍵と階段を上がった廊下前にある鉄柵の鍵をお渡しとなりますので、これからお電話をして頂きます」
「えつ鍵つて、ふたつもあるんですか?」
「そうでござりますね、その階の住人の方にお渡しする事になつておつますので」
「そうですか」

店員がホッと胸をなで下ろす様子が気にはなったけど、あたしはそれよりもハイツが気にいっていたので、深く考える事もなく了解した。

第1杯 新生活はじめました。（後書き）

活動報告更新（主に更新予約時間お知らせなど） Choco 20

11・1・13

少し文章を修正。

11・2・18

Choco 20

第1杯
？（前書き）

第1杯？
1月16日予約投稿。

第1杯 ?

後日、ハイツに来て、ここで初めてこの鉄柵を見た時は、少し驚いたけど、今はこれがあるおかげで防犯の事を心配する様な事もなく、とても助かっている。

あたしは鉄柵を開けて鍵を閉めてから、下の階に下りる。

2階も造りが同じで階段から廊下へ出る手前に鉄柵がある。逆に2階は男性の住人しか住んでなく、女性住人は2階に入れない。建物にまだ見慣れていないあたしは色々観察しながら、やつと最上階の部屋から目的の最下層に到着。

あたしの目の前には大家さんが趣味で経営するあの素敵なCafeがある。外に出なくとも階段から数歩進めば、Cafeの入り口が。

センサーが感知したのか、自動で目の前のガラスのドアがあく。店内は通りからも中の様子が見える口の字型のガラス壁。その壁にテーブルなどが数個置いてある。一般の方は営業時間のみで利用するようになつているが、住人は営業時間以外24時間入れるようにしてある。

「いらっしゃい、トウコちゃん」

白髪混じりのキレイに切りそろえられた短髪。整った髪が好印象の年配男性がコーヒー ロックを片付けてから、しぐらを見て、やさしく微笑んだ。

「こんばんわ、大家さん」

あたしもその微笑に答えるように微笑む。

「どうかしたのかい？」

「うーんと、なんとなくコーヒーが飲みたくなつて」

そう答えながら目の前の椅子へ進み、あたしはいつも座るカウンター席に腰掛ける。

人恋しくなると、ここへ降りてコーヒーを貰い、大家さんと世間話。

「コーヒーはその時の体調や気分に合わせてドリップしてくれる。しかも、ここに住人はタダで飲めるシステムで、とっても重宝している。

Cafeのコーヒーが大好き。大家さんの暖かい人柄とここがすっかりお気に入り、いつも癒してくれる。

今日もいつもの場所にそれぞれ人がいるみたい。

カウンター席では奥に女性が一番端にいる。いつもの席でコーヒーを飲みながら、誰かと携帯で話している様子。

もう一人は道路が見える口の字型ガラス壁に沿つて置いてあるふたり掛けのテーブルに、くたびれ感じのサラリーマンの姿。

女性の髪は肩よりも長く今流行のゆる巻きパーマ。少し茶色がかつた痛んだ毛。歳はあたしより少なくみて2歳ぐらい離れているといつた感じ。

男性はセットしていた髪の毛が少し乱れて、服はスーツにしわがついている。自分の身なりに気を使う事もできないくらい疲れている模様。

コーヒーを待つ間、Cafeの様子をじく自然な態度で観察する。あたしがカウンターに振り向いた瞬間、しばらく携帯で話をしていた女性と目が合つ。以前も閉店後ここに居る時にもこちらを気にかけている様子だったけど、住人とわかっていてもお互い話しかける事までは、なかなかできない物。

第1杯 ? (前書き)

第2杯 19日22時頃投稿予約

Choco · 2011 · 1 / 19

第1杯 ?

そんなあたし達ふたりの空氣を察してくれたのか、大家さんがあいだを取り持つて、女性に紹介しはじめる。

「「」の子は一〇日前ぐらいから、「」で住んでこる富野董子ちゃん

「ふーん、若そうね」

「「」の春から大学生になったのかな？」

「はい、そうです」

「そうなの。だからかあ……えっと、私はね、隣の隣に住んでる岡島ますみよ」

岡島さんの言葉が少し引っかかるけど、あたしは既にせずに自分も挨拶を返した。

「どうも、富野です」

「私は29の〇〇」。よろしく

「わからない事とか教えてもらえると助かります」

「なんでも聞いて。「」結構長く住んでるから」

あたしの顔をまじまじみながら、「」が近づいてくる。そのまま彼女はあたしの隣の席に座った。

「あ～やっぱり肌がつやつやしてるね」

「いえ、そんな事ないです」

「またまた」

「岡島さんの方こそ、歳が2つくらいしかちがわないのかと、逆に

「そう? 董子ちゃんもスッピンの割に肌綺麗よ。ちゃんとお手入れしてるんだね」

「ん、特には、洗顔して、化粧水つけるぐらいかな」「化粧水だけだと、今はいいけど。化粧水後は乳液もつける方がいいんだから」

「乳液した方がちがいますか?」

「何言つてんのつ違うわよつ全然!」

「はつはあ~。あたしそういうのうとくで」

「乳液つけないとね、そのまま化粧水が蒸発するのよ」

「へえ~、そうだったんだ」

「そうなの。それと他には

」

まだまだ話し足りないといわんばかりの岡島さんの話をさえぎる大家さん。

「まあまあ、そのへりこしておいて、コーヒー冷めない内に、ビーフぞ」

岡島さんの飲んでいたカップをそつと置いた大家さん。そのまま彼女に微笑んでいる。

大家さんの気の利いた行動で、岡島さんはあたしの気が殺がれた模様。

「トウガラシやんもクルミ・ミルク・コーヒーどうぞ」

大家さんがそう言つと、生クリームに胡桃をトッピングしたコーヒーがあたしの前に置かれた。

「クルミの香ばしい薫りがしますね」

「そうね、いい薫り」

岡島さんにもコーヒーの薫りがいっているらしく、薫りを楽しみ

たいのが、鼻から湯気を吸い込んでいた。

その様子を見ていた大家さんがガラスコップを拭きながら、あたしたちに説明してくれる。

「そうだね。炒った胡桃をトッピングしたからかな」

「へえ、だからか。それとすゞくミルク感があつて飲みやすいです」

「そうかい。温めた牛乳にコーヒーを加えて、最後に生クリームを添えたんだよ」

「ホントに甘くておいしい」

「よかつたよ、気に入つてもうれて」

そのやり取りをきいていた岡島ちゃんはひといやましそうな表情。

「私もマスターに作つてもらおつかな」

「岡島さんも今からお作りしましょうか?」

「今日はいいかな。今度お願ひ」

「はい、かしこまりました」

「じゃあ、あたしはそろそろ部屋に戻りますね」

「そうかい。カップはまた朝にでもいいし、学校が終わってからでも返しにしてくれればいいよ」

「はい、それじゃカップ戻しに明日来ますね」

ふたりは部屋に戻るあたしへ最後に声をかけてくれる。

「また明日にだね。おやすみなさい」

「おやすみ、またね」

それに答えてあたしもカップ片手に席を立つてからふたりに挨拶する。

「ねやかみなむー」

第1杯　？（後書き）

【準備】くるみは薄くスライスしておきます。

2人分レシピ

牛乳150cc.

くるみ／炒ったもの15g.

コーヒー粉／深煎り15g.

生クリーム／半立て15cc（大さじ1杯）

（1）鍋に牛乳、くるみを入れて、火にかけ、途中かき混ぜながら沸騰させます。沸騰したら弱火にし、30秒程煮込みます。

・（2）火を止めてコーヒーを加え、1分間おきます。

・（3）温めた器に目の細かい茶こしでこしながら注ぎます。半立ての生クリームを浮かべ、くるみを飾つてできあがり。
お好みで砂糖を入れて召し上がりください。

第2杯 IJの瞬間がものす「J」へ好き。（前書き）

タダほど高くつくるものはなーい！？ IJの瞬間がものす「J」へ好きに題名変更しました。

2011/2/3/9:00 Choco

第2杯 「この瞬間がものす」へ好き。

大学から戻り、ひと休みしていた部屋でくつろぐあたしは、暇なので昨日のカップを届ける事にした。

「さてと、カップでも返しに行こうかな」

あたしはひとり呟いてから、寝る前に洗つておいた昨夜のカップをキッチンに取りに行く。真っ白な柄もないシンプルなカップを手に取り、下の階にあるCafeに行くため玄関を出る。

大学から直で帰ってきたから、Cafeはまだ営業中。夕方だからかはわからないけど、店内にはちらほらお客様の姿も。

「いらっしゃい、トウロちゃん」

自動ドアをくぐった瞬間に大家さんがいつもの穏やかな物腰で迎えてくれた。

あたしも早速そんな大家さんへ話かける。

「あつ大家さん。はい、コレ」

あたしはカウンター席の空いていた場所に腰かけて、手に持つていたカップを手渡す。

「昨日のカップだね。洗わなくてもよかつたのに」

「でも、昨日借りた物だったから、洗わないと気持ち悪いかなって」「それもそうだね」

大家さんは自分の言葉がおかしかったのか、クスッと小さく笑つ

て頷いている。

ひと通り大家さんと話した後、昨日の女性が店内に入ってきた様子。横切りかけて、ふと あたしの田前で止まる。

「あれ、昨日の えつと、董子ちゃん？」

声をかけられたあたしは顔が見える様に彼女のいる方へ少し振り返った。

「やうですよ、岡島わん」

「名前あってよかつた」

ホツとしたのか岡島さんはそう言つて、いつものカウンター席奥じゃないとこに座つていた。それはあたしのすぐ傍だつた。仕事に専念していた大家さんがこちらを振り返る。

「こひつしゃい、岡島さん」

軽く視線を大家さんに向け、岡島さんは手で挨拶してからこひつに話しかけてくる。

「昨日のカップ返しに来たのね」

「ですね、岡島さんはこの時間からこひつもこひつに？」

「ま～ね」

「ふ～ん、そうなんですか」

「あ～今暇なやつって思つたんじやない？」

「えつ、そそんな事はないですっ」

「まあいつもて訳じやないけど、野暮用がない田や嫌な出来事とかあつた時は大概ココにいる」

岡島さんは笑つてあたしに少し恥ずかしそうな、照れているような、そんな感じの表情をみせる。

「そりなんだ。確かに『口ひて居心地いいですよね』
「つん、そりそり。居心地良すぎつて、董子ちゃんもそり思つてる
のか」
「もちろんです」
「そんなんじや嫁に行き送れるぞつて、あたしには言われたくない
か」

自虐ネタ話で盛り上がつて来た所、あたし達はお互い顔を見合わせて笑う。そこに大家さんが目を細め、ふたりに声をかけてきた。

「ふたりとも、楽しそうだね」
「えつ」

大家さんの声掛けにあたしたちふたりの声がハモつて、それがまたおかしくて笑つた。その数秒後に静かだった自動ドアが、微かな機械音とともに開く。

そこにはふたりの人影。

第2杯 ?

人影はふたつ共男の人のよう、入口から少し遠めのあたしにも聞えた声でわかつた。

会話をしながら Cafe に入つて来る。何やら少しもめている様子。

「じゃあ、こいつの問題もちよつと見てくれよ」

「んつこれは「 $\Box\Box$ 」が間違ってるんだよ。これはここの数式じゃない。

別の
」

私服を着た男性の説明が中断される。
声をかけたのは入口側に座っていた岡島さん。

「あんたら、うるさいよつ！」

「よつマス姉じゅん。ばんわつ」

軽い口調で制服を身にまとう男の子は岡島さんに気づいたのか挨拶した。

「ばんわじやない、何をもめてんの？」

岡島さんの問い掛けに答えたのが、もう一人いた男の人。落ち着いた口調と雰囲気で、説明してくれる。

「いや、洋輔が数学の問題なんで間違ってるのか尋ねてくるから、説明したのに……どうも 理解してくれないんですね」

苦笑して首を傾げている男の人。

「も～う少し慎一が分かり易く、説明しりよ」

「あのな、お前がもつと基礎をしつかり身につけてから訊いてくれよな」

「仕方ないじやん。血漫じやねえけどさ、最近なんだぜ　まともに勉強し始めたの」

「　それは確かに血漫じやないな」

呆れてなのか、岡島さんがため息をつきながら、ふたりの会話に割り込んだ。

「まあ　ほらっなんだ……勉強し始めたのはいい事な訳だから、もう少し基礎をしつかりとすればいいんじゃないかな」

「そんなんに基礎基礎つて、言つからひは慎一教えてくれんだろうな？」

「？」

「おっ俺が？」

「そうだよね、あんたが教えてあげりやいいんじやない？」

「俺ですか？」

「そそ、あんたさ頭いいんだから」

男の人は頭をかきながら、少し困惑している様。

「いや、人に教えるとなると……難しいんですね」

「じゃあ、後は　　」

岡島さんがそう言いながら、「ひらり」と向きなおし、なぜかあたしを見て來た。

完全に油断してたあたしと彼女の田と田が合図。

「つえ、ああたしつ？」

「そつだ、董子ちゃんが教えてあげればいいんじゃない？」

突然の流れで驚きを隠しきれないあたし。皆がこっちに注目している。その答えになんて返答してよいのかわからなくて動搖していると、誰かが手を軽く叩いた。

それは岡島さんで何か思いついたのか、あたしの答えをきかない内にまた話出した。

「そういえば、3人は初顔合わせだつた？」

「だな。マス姉 誰だよ？」

「ああ、富野董子ちゃん」

「えつと、今月302号室に引っ越したばかりですがよろしくお願
いします」

あたしが言い終わったのを見計らつてか、今度は視線をふたりに移す岡島さん。私服の男の人を見ながら、あたしに紹介してくれる。

第2杯 ?（前書き）

前回の主人公の間違っていた苗字訂正しました。

第2杯 ?

「男前な方が藤井慎一くん」

「うちを向いてから私服の男性が、あたしに頭だけで軽く会釈してくれた。

「俺は203号室の住人。」

次は制服の男の子を指さすと、むつきより雑な感じで岡島さんがあたしに紹介してくれる。

「このいかにもあほ面なのが、本田洋輔」

「つて、なんで俺だけそんな紹介なんだよつ」

「つん？ 特に意味はない」

「んつだよ、それ」

納得できない感じの顔が不満そうな様子。かと思えば、今度は皆に向けて自信たっぷりな口振りで言つ。

「つてか、俺の方が男前じゃなくねつ」

「あんた……それ自分で言つてたら世話ないね」

本田くんは自分の事を一蹴した岡島さんを恨めしそうな顔でみている。

そこへ頷きながら藤井くんがどじめを刺す一撃。

「確かに」

3人の掛け合いにあたしはクスクスと小さく笑う。そんな本田くんは納得できないのか、まだまだ食い下がる模様。

「つてかふたり共、目が腐つてんじゃね？」

岡島さんは顔を横に振りながら、否定。

「腐つてない、腐つてない」

「ちよつ 即答つて、マス姉ひどくね」

「はいはい、それより自己紹介なんだから言つ事あるだろ?」「

「ああ、そつか。改めて202号室の本田洋輔。高3、ようじく

「よろしくね、あたしの1つ下なんだ」

あたしの話から藤井くんが歳を計算したようで、ポツリと口を開く。

「じゃあ、富野さんは大学1年つて事か。俺の1つ下か

「そそ。だから3人共歳近いから話合つんじやない?」

「かな」

ポツリとまた答える藤井くん。

「で、結局何の話してたんだっけ?」

「誰が洋輔に勉強を教えるかつて、話ですね」

「ああ、そそ。でどうなの、董子ちゃん?」

「うーん」

あたしが答えあぐねて漏れた声に、藤井くんは見兼ねてか、もうひと押しとばかりに一言。

「それなら、俺もバイトがなければ、勉強みるし、ね？」

「あたしがわかる範囲でなら……」

「よかつたじやん、洋輔」

「まあな。これも日頃の行いがいいからだろ」

冷たい視線の岡島さんがシラフと本田くんへ釘をさす。

「日頃の行いがいいから　じゃなく、董子ちゃん達が優しいから
だろ」

岡島さんの言葉にタジタジな様子の本田くんは自分の顔を人差し
指でかいている。

「まあ、そうとも言つな」

「じゃあ、俺はそろそろ時間なんで、バイトに行きますね
「頑張つていって來い、勤労学生君」

「じやあな、慎一」

「いっつらっしゃい、藤井くん」

みんなが見ている中、藤井くんはcafeを出て行つた。

第2杯 ?

隣に立っていた本田洋輔くんはとこうと、あたしの隣に腰掛けた後、調子よく軽い感じに声をかけてきた。

「とうあえずよろしくつ董子」

「なつ呼び捨て……」

「ん なんか問題でもあるの?」

「問題ないけど」

「俺も洋輔でいいし」

「あつ董子ちゃん、あたしもマス姉でいいよ」

「じゃあ、ふたりの事はそう呼ばしてもひづね」

ひと通り喋りつくしたあたし達。
少し間が空いた所に洋輔とは違つ男性の声。

「おやおや、お話おわりましたか?」

「だね。やつと落ち着いてコーヒーが飲めそう、マスター」

声の主は大家さん。

マス姉がため息まじりで彼に答えた後、あたしの隣にいる洋輔の方へわかり易く視線を送っている。

「えつ俺のせい?」

「ひらを驚き見ている洋輔。そこへあたしもマス姉に囁つて、ダメ押しの一言を言ってみる。

「あたし達、まだ一杯も飲めてないんだからね

「董子ちゃんも意外と言つたな～」

「あたしも言つときは、言いますよ」

左側のマス姉に自信のある態度で答えたあたし。

大家さんはその会話が終わるのを待っていたらしく、スッと口一
ヒーをあたし達3人の前に並べてくれる。

「じゃあ、今田は3人共にこれでもお出ししようかな」

バニラアイスクリームのような甘い香りが3人の鼻をくすぐって
いる。

「これ バニラアイスのにおいじゃなくね？」

「うん バニラの薰りだつ」

「洋輔の言うとおり、甘い香りが「口ヒーからしてるなあ」

「だろ？ マス姉」

「わかりましたか、みなさん」

「口ヒーをドリップしていた大家さんがこちらを見て満足そうに
微笑んでいる。

「これはどんなレシピで作られるんですか？」

3人を代表してあたしが聞くと、ますます得意げな顔をする。顔
のしわが深くなつた大家さんのくしゃくしゃにした表情がうれしそ
うにみえる。

「んーそつだね、名前を言つとすぐにわかりますよ
「名前にヒントがあるのか～」

少し考えた感じのマス姉がつぶやいた。

それに続けて洋輔が大家さんの答えを急かす。

「じゃあ、その名前早く教えてくれよ」

「いいですよ、バニラバター・カフェオレです」

「へえ、バターが入ってるんだあ～」

関心するあたし、驚きの言葉におもわずため息がまじった。

「みなさん、飲んでみてください」

大家さんのすすめでコーヒーにそれぞれ口をつけた。

口の中には甘い香りとバターの濃くが口いっぱいに広がって、無意識の内につなり声があたしからはもれていた。

「ん～おいしい」

「うん、コーヒーにコクがあつてうま～」

「うめえーな、これ」

「よかつた、気に入つて頂けて」

「コーヒーを飲んで、ホーツと一緒にいて、ゆつたりと時間が流れていいく感じ。

」の瞬間があたし
ものすごく好き。

第2杯 ? (後書き)

バニラバターコーヒー 材料 (1人分)

インスタントコーヒー 小さじ1

砂糖 小さじ2

湯 50cc

牛乳 100cc

バター 5g

バニラエッセンス 2、3滴

1

マグカップにインスタントコーヒーと砂糖と湯を入れてよく混ぜ、牛乳を入れて更によく混ぜる。

2

電子レンジの「牛乳」コースで温めてから、バターとバニラエッセンスを入れてかき混ぜて出来上がり。

3

バター5gの目安として、「きれてるバター」1切れが10gなので、その半分が5gです。

第3杯 タダより高いものはないっ！？

目覚まし時計がけたたましく部屋中に鳴り響く。
日を薄く開けるとカーテン越しに眩しい光が差し込んでくる。
やわらかな春のポカポカ陽気。

寝起きのあたしには当然眩しく、思わずサッと布団にもぐつた。
その状態で布団から腕だけを頭上に伸ばす。手探りでピピピピッ!
鳴り続けるやかましい目覚ましを捕まるため、頭上で数分格闘。
目覚ましに勝利したらしく、部屋があつとう間に物音ひとつ聞こえなくなっていた。

静けさに再び眠気が増したあたし、だんだん意識がベットの上で
遠のいてゆく

・・・

「コーヒー カップを顔に近づけて、あたしはコーヒーの芳しい香り
をお腹いっぱい鼻と口から吸い込んだ。周りには誰もそれを邪魔す
る人はいなく、なぜかあたしだけがココにひとりいる状況。それに
時の流れがわかる様な物体が一切ないだけに、まるで時間がとまっ
ているかの様。

貸切状態のcafeで大満足なあたしはひとりコーヒーを愉しむ。

「コーヒー おいしいなあ　　口ひつてホント天国。今日は誰もお店
にいみたいだし　　」

独り言を言つたとたん、急にcafeで過ごしてたはずが、突然
真っ白で何もない空間に。

「なつなんで？　何がどうなってるの？」

真っ白な空間であたしは独り、アタフタする。何もない空間を宙に浮かぶ様に漂つていたら、急に足元らへんの空間が観音開きの様に開いて、あたしを真っ黒な世界に引きずり込む。

「ちよつ 待つ」

その瞬間、身体全体に痛みが走る。

「いつたあ～～～！」

痛みで目を覚ますとそこは自分の部屋で、どうやらベッドがら寝ぼけて落ちたらしい。

「痛つなんだつたの 今の夢」

腰をさすりながらあたしはベッドに片手を置き、立ち上がりつつして、下に顔を向ける。視界に目覚ましい時計が転がっていた。それを足元から拾い上げる。

「んつ……？」

驚きのあまり、目覚ましを思わず2度みした。

「あれ」「

時計が自分の思つていた数字の所に針が指していない模様。

「今つて何時なのつ」

誰かに尋ねる訳じゃないけど、意識もなく、その言葉をあたしは口走っていた。慌てて机にある携帯で時間を確認。良からぬ想像がチラつと思い浮かぶ。デジタル時計を見た瞬間、それが現実のものに。

真っ青な顔をして、最低限の身支度をするあたし。慌てたあたしはぐつちゃぐつちゃにパジャマを脱ぎ捨て、服に着替える。

「やばい……電車乗り遅れたら、遅刻間違いなしかも

身支度の準備が終わるとカバンに荷物をどんどん詰め込む。それが済んだら、今度は玄関の方へ駆け走った。

飛び出す様にドアを開け出て、あたしはドアノブの鍵穴に鍵をして回す。カチッと閉まる音が鳴つたのと同時にハイツの階段をなりふり構わず駆け下りる。

ハイツの出入口の方へ急ぐあたし。

駆け足で扉に寄つて、それを押して開けると、目の前には昨日知り合つた洋輔がいた。

彼は制服を着こんでバイクに跨ついる。今にも走り出しそうな雰囲気。

バイクのサイドミラーにあたしの姿が映つたのを、洋輔が気が付いたみたいで、声を掛けってきた。

「なんか、慌ただしそうだな？」

フルフェイスのヘルメットを頭から外した洋輔の方へ、思わず駆け寄る。

困り果てていたあたしは洋輔に事情を話してみた。

「そりなの、今日2度寝したみたいで、遅刻かもしれない……」

洋輔はヘルメットで髪のセットが崩れたのを気にしてなのか、サイドミラーで自分の茶色がかつた前髪、やや長めの後ろ髪などを直している。気が済んだのか、やつとこちらの方へ向いた。

立派なM字型の前髪をした彼はあたしの顔を見るなり失礼な一言。

「案外、お前つてどんな奴だな」

あたしはこんな所でチンタラしている場合じゃない、と彼の嫌味を含んだ言葉に目が覚めた。

「悪かったわね。それより急ぐから、またね」

気分を害したあたしは彼をまともに見ないで、別れの言葉を押し付け、ズンズンと1・5メートル程を歩く。
その時、呼び止める声が。

「あつ、おいてウコー！」

あたしが振り返ると、今の今まで話していた洋輔は何か言いたげにしている。急いでいたけど、その彼の表情を察して応える事にした。

「なに？ ホントに急いでるの」
「しゃーないつ俺が送つてやらなくもないが」「ホントに？ ジゃあ、お願ひ！」
「ほい、来た。じゃ、後ろに乗れよ」「うん」

ありがたい洋輔の言葉に甘える事にして、あたしは進んだ道を戻つて、また彼のいる場所へ駆け寄る。

「はいよ、これ被れよ」

駆け寄ったあたしに洋輔は自分が持っていたヘルメットじゃなく、別の物を渡してきた。可愛らしいヘルメットを受け取り、それを頭に装着して、彼の後ろに乗り込んだ。

「用意はいいか？」
「うん、いつでも」
「大学つてどこの大学？」
「何？ 聞えないと！」

バイクのエンジンを掛ける音とヘルメットが音を吸収してるので、
人の声が聞こえにくい。あたしはもう一度訊き返した。

「だから、大学どこだよつ！」

「大学ね。大学は桜花女子短大つ」

普通のトーンで話を使用もんなら、バイク音のせいで、なかなか
会話が進まない。

そんな事もあって、少し大きめな声で会話しているつもりだった
けど、ふたりの近くを通行している学生さん、○ーさん、その他大
勢が迷惑そうな感じで、チラつとこちらを見ている。

その嫌な感じの視線に気付いたあたしは、恥ずかしくてヘルメッ
トの中の顔が、真っ赤っかになるのだった。

第3杯 ?

あたしと違つて、洋輔は何も感じていないのか、気づいていないのか、相変わらずの大きな声で応答してくれる。

「わかった、桜花だな」
「うん」
「よっしゃ」

気合いの入つた洋輔の掛け声と共に、バイクにあたしを乗せて、走り出す。

いくつかの信号を通り過ぎた時、フルフェイスのヘルメットが振り向いた。ヘルメットのガラス部分が開いて、何かあたしに言つてくる。

「あのせ、せつきからメットがぶつかりまくつて、痛いんだけど」「えつ？ 何！？」

信号は赤。なので、隣に車も止まって、エンジン音の合図がうるさい。相変わらず、話が聞き取りづらい。

信号が赤の中に、何か伝えたいのか、更に洋輔の声が大きくなる。

「だから、メットだよつ。メットがお互いにぶつかって、痛いしつてんの！」

「「」、「ごめん。ヘルメットって装着すると、こうなる物だと思つて」

「な訳、あるかい？」

「マジ、ごめんって。あたし、バイク乗つたの初めてだから」

「だったら、俺のメットから頭ズラして、乗つれば、ガンガンしな

くなるから

「わかつた、そうするー！」

洋輔に言われて、頭を彼のヘルメットから、ズラした。言つ通りにしたら、頭同士がぶつからなくなつて、快適なバイクの乗り心地なる。

しばらく、短大の方向にバイクで走行する。信号が赤になると、短大への道を時々尋ねてくる洋輔。
学校に到着するまで、それを時々繰り返すのだった。

バイクから見える景色が短大近くの風景に確実に変化していく。
気が付けば、短大前に到着していた。

バイクのブレーキ音が鳴つて、バイクが安全に止まる。
メットを脱いだ洋輔が、短大の名前が彫られてあるプレートを指差して言つ。

「ここだろ？」

会話する為に、自分のかぶっていたメットをあたしも脱いだ。

「そう、ここ。サンキュー」

「まあな。俺も役に立つだろ？」

「うん、超助かつたかな」

「だひつ」

会話が終わるとあたしはバイクからすぐに降りた。

ずっと、バイクに乗っている間中、時間が気になつていたあたし。携帯を取り出して、待ち受けのデジタル時計を見る。

時間は講義の始まる10分前を刻んでいた。

余裕の時間に到着した事で、ホントあたしは胸をなで下す。手に持っていたヘルメットを元の持ち主に返した。

「ホント、ありがと」

「ああ」

あたしからメットを受け取った洋輔は、元の場所にそれを取り付ける。

「あれっそう言えば、洋輔、高校は？」

「あつ、俺はいいのいいの。気にはんなつて「でも……今からじゃ遅刻するんじやない？」

「いつもの事だからな」

笑つて、大した事ない様に言つ洋輔。彼は手に持つていたメットをかぶり直す。

「んじや、俺、もう行くわ」

「うん」

再びバイクのエンジンを掛ける洋輔に頭を下げて見送るあたし。彼の姿はあつといつ間に見えなくなつた。

第3杯　?（前書き）

一時停止していた小説を再開できるようになりました。
ゆっくり活動していくので見守つていただければです。

chocho 2011/5/

24

第3杯　?

洋輔の送迎で、見事講義へと間に合つたあたしは、午前中すべての講義を済ませて今は食堂にいる。

食堂は一昨年くらいから一般開放して、それに伴つて食堂の内装はとってもおしゃれな感じになっているのだった。

外から一般の人も食べに来られるので、ちらほら一般人の人が、学生にまじつてたりも。

今も食堂はすごく大事に使用されていて、みんなのお気に入りスポットになつていて。

あたしは時々、外のお店にいるのか、と錯覚する事があつて、たくさん的学生を見ると、現実に戻される事がしばしばで、今はちょうど、そのお昼の休憩タイム。

こここの女子学生が、食堂で思い思い過ごす姿を、多く見られる時間。教科書片手に小難しいそうな様子の子や友人と会話を楽しんで食事している姿。

あたしはと言つて、今日は友達とまだ一度も出合つていない。なので、独りさびしくご飯を味わつ事に。

今日の食事は独り決定。でも、目の前にはお昼の至福が。可愛らしいテーブルクロスが掛けたてあるテーブル上に、お昼のオムライスとペットボトルのお茶。タンポポの様に卵が花開き、半熟の卵の下にはバーライス、上のソースは大好きなハヤシソース。あたしがつてもおいしそうつと思い、大口を開けて、スプーンを飲み込もうとした時、寸止めする声。

「あ～トウコウ～」

渋々その口に入れかけたスプーンを、いつたん口から離して、声

のする方を恨めしく振り返つたあたし。

そこにはやや長身で、髪は毛先に緩やかなパーマをつけたショートボブの女子が、なにやら、とつてもニヤついたご様子。

「なんだ～弥生か」

「あたしじゃ悪い？ 隣座るよ」

「うん、どうぞ」

自分の荷物を置いている椅子から、弥生のために他の場所へ荷物を移動。

開いた場所へ、彼女は手にあるプレートをテーブルに置き、次に肩にかけた鞄を置いてから、あたしの隣へ腰掛けてくる。

「な～んか、ニヤついてない？」

「朝さ～学生服来た男子といなかつた？」

「ん、いたけど。なんで？」

スプーンに乗っているオムライスが食べてと言わんばかりに、おいしそうな匂いで、会話中のあたしを誘つてくる。その誘惑についつい負けてしまった。食べ物にうえている自分の口へと、ワансスプーンオムライスを運んだ。

「あの人って、トウコの、もしかして 年下の彼氏？」

やつといふと、口に運んだオムライスの大半が味わう間もなく、口から消える。

「ンフツ
」

テーブルの上へ四方八方に、飛び散る白や黄色い物体たちを拾い

ながらも、しっかりと質問の返答をかえす、あたし。

「ちがつちがつよ。弥生が変な事言つから、口の出しあげつけたじやん、もう」「汚な~い、トウガが話てる時に、口に入れるからっー。」

ひとつひとつ拾つて、持つていたティッシュを取り出して、そこに集めたものを泣く泣く包む。そんな忙しなく、テーブルを片付けるあたしに、何か言いた気な視線で見ている弥生。

第3杯 ? (後書き)

今回お話を少しこそく予定かな。いつもより長くなるかもですがお付き合いをお願いします。

第3杯 ?

「またまたあー。トボけちゃって「別にトボけてないんだけど……」

「ふうん、んじや、アプローチしてみよっかな」「いいんじやないの、別に」

「もうつ！ 全然おもしろくないつ」

「何が？」

「その反応が、つまんないの」

「そんな事、言われてもね」

不服そうな弥生はわっさの一矢ついていた表情をガラリと変え、つまんなさそうにしている。彼女は何を期待しているのか、あたしにはさりげなくわからないんだけど。

気を取り直した弥生はランチに手をつけようとして、口元に運んだお箸をポロリと落とした。

「今度は何？ どうかしたの？」

「あ……あれ」「

「 つん？」

弥生が指差す方を振り返るあたし。

後方でざわつく女子大生達。

ガラス越しに外を見ると、そこには、朝別れたはずの洋輔がいるのだった。

「……なんで、いるの？」

あたしは食堂を出た先の目の前にいる洋輔に、いつの間にか、問

いかけていた。

洋輔は頭をポリポリかきながら、あたしに言つ。

「あのや、今日講義終わつたら、飯食いにいかね?
急になんで? 食事に行かないといけないの?」

周りの女子大生達があたしたちを遠目に見ながら、ヒソヒソ話をしている。時々こちらを見てはキャッキャッしている。その事が少し気にはなるけど、そのまま会話を続けた。

「俺、今用ピンチなんだよ。今日誰のおかげで遅刻しねえで、済んだのかな?」

「な、何つはじめつから、それが狙いだつたの……もしかして?」

「まあ、否定はしない」

「呆れる もうつ」

「んじや、嫌でも迎えにくるからな、逃げんなよ」

「わかったよ、今日だけだからね。あたしだってお金ないんだから

「サンキュー、じゃあな」

言いたい事だけ言つて、洋輔は満足げにキャンバスの出口に歩いていくのだった。

いつまでもあたしはその姿をポカンつと見ていた

誰かに

声を掛けられるまでは。

「やっぱ、氣があるんじやないの?」

「そんなんじや、ないつて……つて

あたしがその問い掛けに反射的に答えてから、背後を確認すると、そこに何故かいるはずのない弥生が立っていた。

「弥生 　　この間に？」

「ん？ 　あ、 　いつの間にだらうね」

「といいで 　余話聞いてたの？」

「えつ~いあ 　まあ、 　そうなるのか……な？」

あたしを誤魔化そうと、首を傾げながら曖昧な態度をとる彼女。

「素直に聞いてた、 で 　もう、 いいよ」

「じゃあ、 お言葉に甘えて。 しつかり聞いてましたテートのお誘い
を」

ちやっかり事実を認める弥生に、あたしは呆れながらも誤解を解くのだった。

「だあ~か~らあ、 そんなんじやないってばー。」

第4杯 今時の高校生は・・・・・

色々昼休憩にあったものの、すべての受ける講義が終わり、あたしは机の上に開いていた筆記用具たちを片付ける。

「さてと、約束通り待つとしますか」

「おффファーストデートに行かれますか？」

隣に座っている弥生が、あたしを見上げてから茶化す様に言った。

「だから、なんでそうなるかなつもつ」

「そんなムキに否定しなくてもいいじゃん

「別にムキにはなつてないよ」

「そつ？」

「そゝなの」

「はいはい。んじゅ、行つてくれば？」

「まあ、とりあえず行つてこよつかな」

会話を終えたあたしは講義室を出た足で、洋輔が待つている場所へ移動する。

携帯の音が鳴り響く、それはあたしがお気に入りの歌手の着うた。カバンから探しながら携帯を取り出して、画面を見る。メール受信が1件。

「んつ弥生からね」

メールを開きみると、そこにはこんな事が書いてあった。

「期待してた訳じゃないけど、土産話後で聞かせてね（^_^）Vつ

て、もう

負けじにあたしもメールを返す。

「期待には応えないし、もし、何かあったとしても言わない（へへ）
つて、起るわけないしね」

弥生の茶化したメールに返信を終えて、そのままキャンバスから
あたしは目的地まで歩くのだった。

正門入口付近に立つて、目の前の道路を眺めて待つ事、15分。
幾度も車やバイクなどがあたしをどんどんスドウリして行く。し
ばらく、そんな状況が続いた。

さすがに同じ風景を眺めてるのも、いい加減飽きてきた頃、待ち
人がバイクを走らせてこちらに来る様子が、見えた。

「よつつ待たせたな

メットの前にある透明な部分を上にあげて、洋輔がバイクに跨つ
た姿勢のまま言った。

「結構待つたよ、ホントに。連絡くらいしてくれれば
確か俺、トウコの携帯とか聞いてなくね？」

「あれ、そうだったっけかな？」

「ああ、そうだよ。とりあえず、バイク乗れよ」

「あ、うん」

朝のメットをあたしが頭に装着したのを見計らつて、洋輔はバイ
クにエンジンを掛けた。次々に移り変わる風景や風を感じながら、
朝とは違う今度は彼が主導権を握っている。

あたしは目的地に到着するまで、何も指示もしなくていいから、

楽。ただ大人しく座つていい。

バイクは何事もなく目的地に着いた模様。

第4杯 ?

洋輔がバイクを止め、エンジンを切る。こちらに振り返った彼はメットを外して、あたしに言つ。

「着いたぞ」

「じゃあ、降りるね」

「んっああ」

洋輔からバイクを降りるのに了解を得て、あたしはメットを彼に返す。いつもの場所にメットをしまった彼が駐車場を指差して言つ。

「俺」「イツを置きに行かねえと」

「そうだね。じゃあココで待つてたらいいよね?」

「ああ」

同じ様にバイクから降りた洋輔はエンジンを切つて駐輪場へ。あたしは手押し車の様にバイクを押して歩く姿を見送つて、目の前にある建物を観察し始める。

建物の下は駐車場と駐輪場があつて、そこから建物の入口に続く階段。そななどこにでもあるファミレス。

外壁にはおすすめのメニューの垂れ幕の様なものが吊るされていく。それを見ながら、どのメニューもおいしそうだな、と田代移りしていった。そこへ洋輔が声を掛けてくる。

「おい、入るぞ」

「うん」

戻ってきた洋輔にうながされ、あたしたちはファミレスに入る。

「いらっしゃいませ。大人2名様ですか？」

「いや、中に連れがいるから」

「お連れ様ですね。どうぞ中へ」

店員が軽く会釈してから、店内を腕だけで案内する。その前を何事もなしに横切ろうとする洋輔に、あたしは疑問をぶつけてみた。

「他に誰かいるの？」

「えっ言ってなかつたつけ、か」

「うん。何も聞いてない」

「……細かい事、気にするタイプ？」

「ん 時と場合によつるかな」

白々しい会話を交わして店内を進むあたしたちに、窓際の奥の4人用テーブルが並んでるところから、誰かの声が聞こえる。

「洋ちゃん、いらっしゃり」

あたしの視線の先にはバリバリのギャル系の女子高生が、顔を覗かせていた。ガラクタのロボットの様に顔を洋輔の方に向ける。

「てかつ誰？」

「んつ？俺のかわいい彼女に決まつてんじやん」

また、彼女の方に視界を向きなおして、冷静にあたしは状況を把握しようと努めてみる。

「ああ、洋輔の彼女ね……って、そうじゃなくて」

「あつ？なんか問題でもあんのか？」

「ない訳ないでしょーがつ」

彼女に愛想良く手を振っている洋輔に、怒りに似た感情が湧くの
だった。

「でつ何が?」

あたしの「反応」とは裏腹に洋輔の態度は悪びれる事もなく、とぼけ
るでもなく、なんとも鈍い反応。その上、全然問題にも気づかない
様子。

「だから、まさか彼女も」「あそつになる氣?」
「あそたりめーじゃんか」

まるで、当たり前の様に洋輔は答えたが、この態度を見る限り、まだ、あたしの財布事情を把握できていらっしゃい。目の前の後景に、思わず自分の額を抱える。

「まあ、細かい事は気にすんなつて」
「気にするでしょーがつ」
「そう、怒るなつて。俺、今腹減りすぎてよ死にそつなわけよ
「つたく、とりあえず座ればいいんでしょう」

文句を言いながらも、洋輔の彼女が待つテーブルへ。彼は彼女の隣に、あたしはテーブルを挟んだ向かい側のソファーアにそれぞれ座る。

「わりいな、待たせて。どつかの誰かが、ごねつて

洋輔が話終わらない内に、誤解のないようこ、あたしは彼の言葉に割り込む。

「誰がごねつたつて?」
「ん~なんか、ふたりとも~険悪なカンジイ?」

気が抜けるような軽い感じの声と、それに語尾の最後があがるイントネーション。そんな軽い感じの口調で言葉を発したのは、洋輔じゃなく、彼の彼女。大人の対応を努める為に下手な愛想笑いで、

その場つぶやいた。

「やういう訳じやないんだけどね、予定じやおいるのはひとつと思つてたから」

「おねえさん、ミズの事ない、ゼンゼン氣こしなくていいの」と

おねえさんとこう言葉にて、全くシッククリ来ないあたしは弓をつた顔を苦笑いでなんとか」まかす。

「遠慮すんなつて、ミズ」

「洋ちゃんがそう言つたら～食べちゃおつかなつミズも」

「コラコラ、そこつ人の話聞いてたわけ？」

「大丈夫。おねえさんつミズはあ小食だから～」

「いや、だから　　ね」

会話を拒むかの様に突如ピンポンと、あのベルの呼び出し音。話を続けようとした矢先、あたしたちのテーブルに注文を受けようと、既に店員さんが待機していた。いつもなら喜ぶはずだけど、今があたしには素直にそうできそうにもない。

とまどうがそれでも店員さんの手前、文句いう訳にもいかないで、一応注文する事に。メニューのソフトドリンクが数種類並んだ写真を指差す。

「えつと、じゃつこれで」

店員さんはあたしの指差した場所を一度見て、こちらに視線を戻してから微笑えんだ。

「ドリンクバーおひとつですね」

注文の確認を取ると、店員さんは手元の機械へ料理を入力。続いてその様子を見ていた洋輔が、メニューの商品をあちこち指差し注文する。その動作や口調にはなんの迷いもない模様。

第4杯 ?

「んじゃー俺はね、腹減つてるし、これとこれとこれがいいな
「そちらでしたら、セットメニューで」用意できますが？」

洋輔の注文に反応した店員さんが、すかさず彼にお得なセットメニューをおススメ。

「セツトあるなら、それで
「かしこまりました」
「ミズは？ 注文決ましたのか？」
「つうん、まだなの。何がいいかな？」
「好きなもん、頼めばいいんじゃね？」
「じゃつ洋ちゃんと一緒に」
「かしこまりました、それでは」注文を繰り返しま

店員さんが確認を取っている間に、口ソロソと鞄から自分の財布を取り出して、お金の勘定をするあたし。

頭の中の計算を終えて、財布から視線を元に戻した。

目の前はガランとした空間だけがあり、見事に向こうの端まで見通せる。

そして、そこにいるはずだった人の姿がない。どうやら夢中で計算していたあたしの耳には、いつの間にか店員さんの声が、聞えなくなっていた模様。

キヨロキヨロと店員さんの姿を探しながら、状況を把握するため洋輔へ問いかけた。

「あれっ、店員さんは？」

「もう、向こうに行つたけど、返事ならしどこだよ

「あ そう、ありがとう」「どういたしまして」

満面の笑みで洋輔が得意気に答えたのを最後に、あたしとの会話がなくなるのだった。

そこに洋輔の隣に座る彼女がイジケルような口調で、彼に問い合わせ始めた。

「洋ちゃん、最近忙しいの？」

「なんで？」

「だつてえ、なかなかデヒトしてくれんないんだもん」

「ああ、それはミズとの将来を考えで、俺は今大学行くための勉強してるんだぜ」

「その話は聞いたけど、ミズすん」「寂しいのか

彼女は洋輔の服を細くきれいに手入れしている指で少しつまんで、自分の方へ彼をグイグイと寄せる。

引き寄せられた洋輔はなにやら彼女の耳元で囁く。彼の一言で、ふたりの空気が変わったのか、ラブラブなご様子。

食事が運ばれてくるまでの辛抱だ、とふたりのラブラブっぷりを横目に何度も自分へ言い聞かせるあたしの瞳に、注文した商品を引き連れた店員さんの姿が。

今日は特別その姿が輝いて映るのだった。

到着した店員さんが運んできた料理をそれぞれの皿の前に置くと、テーブルいっぱいに美味しそうな香りが広がる。

「(注文は以上)ですか?」「はい」

店員さんが白い紙を透明の筒の様な置物の真ん中に紙を差し込む。軽く会釈して去つていった。その間中も彼らは何も気にせず、ふたりだけの世界。

いろんな意味でお腹いっぱいのあたしはうんざりしていた
水分で胃袋はチャポンチャポン。目の前のバカップルのせいで、今でもお腹がはち切れそうだった。

理由はイチャイチャする洋輔たちを暖かく見守るスキルなんて持ち合わせていなかつたから。飲み物を一気に飲んでは、その度にドリンクバーへ何度も足を運び、往復する始末。

ふたりはすっかりあたしの存在を忘れているのか、それとも、今時の高校生は公衆の面前で恥知らずな行為を、遠慮なしにやつてくれる程、動物的本能が抑えられないお猿さんなのか。

第5杯 董子ぢやんりしげ（前書き）

急な質問からタイトル上記に変更しました。

30 〇〇〇〇〇

9 / 1 18 :

第5杯 董子ちゃんらしい

「アカウント」

食事が終わり、フードコートから出るあたし達。はじめに話したのは、『機嫌なそうな声の洋輔。それに続いて言葉を返すけど、適当な感じのトーンで答えるあたし。

「ル・ル」

お会計が済んだばかりの自分の財布の中を再確認。あたしはすっかり軽くて薄くなつたのをヒシヒシと実感するのだった。
あたしがお財布を見て嘆いている時、ふたりはまたラブラブモードに突入したみたいで。

「洋ちゃん、おいしかったね」
「そうだな、うまかつたな」
「今度はふたりだけでココに来よううね」
「来月、バイト代でも入つたら、行くか」「うん、楽しみにしてるね」

送つてもらうつもりで、ふたりのやり取りを早く終わらないかな、
と思って聞いていたあたしは、会話が終わるのをひたすら待つた。

「んじゃ、俺ら二つで

「まあまあ?」

思わずあたしはキョントンとなる。洋輔が何を言つてこらのが、理

解できない。

それを察してなのか、あたしの態度に拍子抜けしたのか、ポリポリと顔を指でかきながら洋輔が言つのだつた。

「いや　俺らも、バイクで帰るし」

「まさか、あたしをココに置いてくつもりとか？」

「ああ、そのつもり」

「つうええ！」

声にならない声が、氣づくと、あたしから飛び出していた。その声がうざこりしく、不機嫌そうな顔になる洋輔。

「何？　子供じやあるまいし、独りで帰れんじやね？」

「まあ……それはそうだけど、送つてくれたつていいでしょ？」

「なんで？　俺、彼女送んないと」

呆れたあたしはそれ以上、会話する氣にもなれず、彼らを見送る事を選んだ。

「おねえさん、『じゅわいつまでしたあ』

洋輔のバイクの後ろに、ガツチリと彼の腰に細い腕を回した彼の彼女が、顔だけを少し下げて言つた。

両頬にえくぼをたずさえた彼女に田田を向けて、答えを返すあたし。

「どういたしまして。それと歳ひとつしか違わないし、名前かなんかで読んでくれれば

「ん」

あたしの言葉に何かを思い出そと彼女が考え込んだ様子。少し

の間が経つてから、誰ともなく尋ねる彼女。

「名前って、まだ教えてもらっていないよ？」

バイクにまたがっているだけだった洋輔が、あたしと彼女の会話に急に口を出して来るのだった。メットをかぶろうとした手を止めて、素朴な彼女の疑問に彼は答える。

「ミズ、彼女は富野董子で、俺とハイツが一緒」

「ふーん、同じ住民さん仲間だったの」

「そういう事。何度か会うかもね、あたし達」

「だね。じゃあ、下の名前でトウ「ちやんって呼ぶね。ミズはあ、

橋瑞奈つて言つのよ」

「タチバナ ミズナちゃんね、よろしく

第5杯 ?

「つて言つ感じで、そのあとは歩きで帰つて、ホントに今もクタクタですよ」

あたしはコーヒーの香ばしい匂いが立ち込めるカウンターで、昨日起きた出来事をマス姉に身振り手振りで話をした。話が終わる頃には、またドツと疲れ切つてしまつた。

「あつはつは、そりや、傑作だ」
「もうつ傑作じやないよ、マスねえ」
「にしても、迷惑な奴だな、相変わらず洋輔は」
「ホント、迷惑ですよ。計算外のお金いっぱい使つたし」

あたしがヨタヨタとカウンターから、身体をなんとか起すのを見ていた大家さんが、見兼ねてなのか、マス姉へ一言。

「岡島さん、董子ちゃんを笑うなんて、かわいそりうですよ」
「マスターは優しいね。特に董子ちゃんには」
「そんな事ないですよね、大家さんはみんなに優しいんですね」
「そつ？ まあそうだな」

最後にそう言つて、マス姉がつと田を細める。黙つて田の前にある「コーヒーを飲み始めたのだった。

あたし達の話が終わると、大家さんが心配そうにまた声を掛けてくれる。

「それじゃあ、董子ちゃんは昨日お金使つて大変じやいのかね？」
「そうですね、仕送りも来月にならないとないですし」

「これから、ついで朝ごはん食べて行きなさい。朝食べないと元気でないよ」

「でも、そんな事できないですよ。大家さんご迷惑かけませんし」

「でもね、『』のハイツ住人が迷惑かけたようだし、やつをせておくれよ」

少し間、考える。あたしの頭の中では、勉強で計算するよりも早く、お金を計算していた。

そして、出した答えは。

「それじゃ、お言葉に甘えさせてもらいます」

「一ヒーの焙煎の手を止め、大家さんは改めてこちらを見た。田尻にシワを少しづつ刻みながら、頭を上下させて言つて

「やうだよ、そりゃい」「
『』迷惑だと思いますが」「
そんな事はないよ」

答えた後、大家さんは手を再び動かす。黙々と真剣な眼差しで、鍋の作業に集中し始めた。

「ま～よかつたじゃない、董子ちゃん」

「ホント、そう思います」

「飯でもお『』てくれる彼氏、2人や3人いないの？」

「いれば、昨日の時点で既に頼つてます」

「そら、そうか」

あたしの即答にマス姉は、小さく笑った。

「董子ちゃんは好きな人いる?」

手元のコーヒーを飲み、ポツリと言つ。彼女の瞳は真剣そのもの。あたしはその瞳に見つめられて、なんとなくたじろぐのだった。

第5杯 ?

「ど、どうしたんですか、急に？」

あたしが次の言葉を発するより先に、マス姉が視線をあたしから手に持ったカップに移す。

「んーなんとなくさ」

マス姉の元気のない声が少し気になつたけど、聞かれた事にあたしは答え返した。

「今はいないです、あたしの大学女子だけだし」

「ふ～ん、出会いがないのか」

「まっそんな感じ ですね」

「じゃあさ、あのふたりはどうよ？」

「えつ あのふたりって？」

「この前紹介したコ。藤井慎一くんと洋輔の事」

「う～ん、あんまり藤井くんの事知らないし、洋輔に限つてはない

……」

間を少しあいてから、あたしは尚もどじめを刺すかの様に言い切る。

「ないつうん。彼女いるし ないですね」

言い切つた後、何度もうなづくあたしに、納得できくなさそうな顔のマス姉。

「んじゅ、董子ちゃんは誰かのものだと、諦めるんだ?」

ちゅうとの間考えてから、続きを答えるあたし。

「ううん、諦めるつて訳じやないけど、
彼があたしの方を見てくれるまで待ちます。
何より、彼女と自分の間で悩んでる姿は辛いし、
そんな中途半端な付き合いもあたしは嫌です。
それにどちらも選べないって事は その人は、
あたしじゃなきゃダメっていう事じやない気がする」

自分の考えを言い切つてから、あたしは沈黙しているマス姉の様子を伺う。

「つて、あたし真面目に答えすぎちゃったかな?
「ん~なんか、董子ちゃんらしいな」

マス姉はまたカップを取り、「コーヒーを一口飲んだ。ゆつくりと味わっていた」「コーヒーをちょうど飲み干し、カラッポのカップを見つめたまま、一息つくと皿の上にカップを置く。

「さてと、そろそろ出勤するか」「マス姉、今から出勤なんだ?」「うん、ま~ね。休日出勤つて所かな」「社会人は大変なんだね」「そういう事。じゃ、マスター」ちりそつ様

大家さんは仕事している手を止め、声が聞こえる方に顔を向ける。あたしの隣にいるマス姉へ優しく微笑んだ。

「岡島さん、いらっしゃい

なぜか緊張気味で少しこわばつた様な顔をするマス姉。大家さんの声を聞いてか、表情が和らいだ。

今まで強気な姿しか知らなかつたあたしの目には、少し弱々しい感じに映る。彼女は出していた自分の物を鞄に詰め、カウンターに手をつき腰をあげた。

「それじゃ、いってきます」

お店の出口にマス姉はゆっくり歩いて行くのだった。

第5杯 ?

あたしはマス姉と会話しながら、待ち人を待とうと、思っていたが、その肝心な相手は休日出勤。話相手がいなくなつて、時間を持て余す事に。

「おや、董子ちゃんは今日出掛けないのかい？」

「はい、あたしは昨日に続いて、今日も洋輔の子守りです」

「そうだったのかい」

「はい。でも、今日は藤井くんも一緒なので、少し気は楽ですけど」

あたしは少し苦笑を含めて、大家さんに答えた。

「そう、それはよかつたじゃないかい」

「はい」

「じゃあ、一日に二回いるんだね?」

「はい、そうなりますね。洋輔に勉強教える約束になつてているので」「そういうかい それなら、みんなで勉強会なさるのなら、口

「で食事等用意しようかね?」

「でも、この迷惑かからないでじょうか?」

「大丈夫、心配はないよ。しっかり洋輔くんには勉強してもらわないと」

「ですね。後、あそこのテーブル占領してもかまわないでじょうか?」

「?」

大家さんも洋輔に対し、そう感じていたのかと、思つたらおかしかつた。それでも笑うのを我慢して、あたしはカウンターの斜め後ろにあるテーブルを指す。

「ああ、かまわないよ。もし

混みそつになつた場合は、図

書館にでも移動してもらおうかね」

「じゃあ、それまでお言葉に甘えさせてもらいます」

「ああ、そうしておくれ」

あたしとの会話が終わるとまた大家さんは、自分のしていた仕事の続きをやり始めた。また会話相手がいなくなつた為、あたしは自分の鞄に手を伸ばす。

あらかじめ、自分の鞄の中には時間つぶしの品々を、こんな時のために仕込んでおいた。

あたしはどれにしようかと迷うしながら中を探る。一度手に持った物をマジマジ見てから手から離し、また違う物を取り、悩む事數十分。なかなかどれがいいか決められずにいた。

ずっと鞄とにらめっこしていたあたしの目の前に、スヌーツコーヒーを持った手が現れる。視線を鞄から外して、手が現れた方に移した。

そこには田を細めて優しく微笑む大家さん。

「はい、これ

大家さんがそう言って、カウンターに置いた白いコーヒーカップを指で指す。

「あつありがと」「ありがとうございます」

「まだ、ふたりとも来られないようだね」

「ですね。もう約束の時間なんだけど」

「まあ、これでも飲んで待つといつよ」

「はい

」

第5杯 ?

返事をしてから、あたしはカップを自分の方に引き取る。普通のコーヒーかと思って見ると、生クリームが乗ったコーヒー。見た目からワインナー「コーヒー」だとわかり、得意げにあたしは大家さんに声を掛ける。

「これなら、飲んだことがあります、ワインナー「コーヒー」ですよね」「ああ、そうだね。オーストリア、ワイン生まれの「コーヒー」ですね」

相槌をうつてくれた大家さんは、続けて、詳しいお話をしてくれる。

「今はワインナー「コーヒー」とも呼ばれているけど、昔はアイン・シュペンナーという名称だったんだよ。」

その名前は【1頭だけ馬車の御者】の意味をもつていてね、この言葉通り、客を待つ御者が親しんで飲んでいた飲み物と言わ
れているんだよ」

「ちゃんと「コーヒー」の名前にも意味があるなんて、奥が深いんですね」

「ああ、そりなんだよ。待つって所は今の董子ちゃんと同じだね」
クスッと笑う大家さん。

「ですね」

「本当にふたりとも来られないようだね」「もしかしたら、藤井くんはバイト長引いているのかもしれません」「そうかい、洋輔くんは何か用事でもあるのかい?」

「いえ、そんな事は言つてなかつたから……洋輔は、寝坊かな」

「それじゃ、おこしにでも行こうかね」

「あつ携帯教えてもらつたので、電話してみます」

「ふむ……それでダメなら、おこしに行つてみようかね？」

大家さんはどうもあたしに気を使つてくれてるみたい。

なぜかと言うと、このハイツは階層によつて男女の入居が分けられてゐる為、女性が男性の入居している2階には入られないようになつてゐるからだ。

電話が通じなかつたら、あたしの待ちぼうけがまだまだ続く事が決定だけど。それでもひとり暮らしのあたしにとつて、安心できるシステム。

時には不便だけど

「その時は、大家さんお願ひします」

「それなら、早く電話をかけておあげなさい」

「はい。それじゃ、電話してみます」

携帯片手にあたしはそう言つてから、Cafe出入口から出る。自動ドアが開くと少し曇つた感じの空が、ハイツの出入口のガラスのドアから見えた。

自動ドアが開かない場所に少し移動するあたし。

誰の邪魔にもならない場所で、携帯のボタンを押しかけた時、ハイツのドアが開いた。

そこから入つてきた男性と、あたしは田と田が合つのだつた。

息が荒い男性とあたしは、同時にお互ひを指差して声を漏らす。

「あつ」

第5杯 ? (後書き)

【1杯分】

コーヒー粉 / 深煎り 12g

生クリーム / 半立て 30cc (大さじ 2 杯)

コーヒーシュガー 20g (小さじ 5 杯)

【作り方】

(1) 101 サイズのドリッパーとサーバーを使用し、コーヒーを 120cc 抽出します。

(2) 温めたコーヒーカップにコーヒーシュガーを たっぷりと入れます。

(3) (2) に (1) のコーヒーを注ぎます。

(4) (3) に半立ての生クリームを浮かべます。

第6杯 勉強と「一ヒー」と酒

息が上がった男性は、この前紹介された藤井慎一くん。あたしに話しかける為か、息を整えているようだ。

「ちょ ちょっと待ってね」

肩を上手くとして言う藤井くんを見て、あたしはウンウンと声を出さないで頷いてみせた。それでも彼はとても気にしている様子みたいで、身体の前で手を合わせて謝ってくれる。

「ごめんな、遅くなつて」

「あついえ。大丈夫ですよ」

首を左右に振つてから、あたしは優しく答えた。

「そう。洋輔も中にはいるの?」

「ああ、いないです」

「なんでだい? 今日勉強する口だつたんじや」

「そりなんですが、寝てるっぽくて」

「なんだ、そういうのか」

「……はい」

藤井くんに応えた後、あたしが悪い訳じゃないんだけど、どうしてか、彼に悪いような気分になった。

「ずっと、洋輔と俺の事待つてくれたの?」

何も言わずにあたしが頷いたら、改めて藤井くんは汗をぬぐつて、

申し訳なさそうに言ひ。

「ホント～に悪かつたね、洋輔に連絡とかすればよかつたんだけど、
携帯忘れて」

「気にしないで下さい。張本人、グースカと寝てますから」

「そうみたいだね」

ホツとしたのか藤井くんがハニカンだ顔で、照れた様子を見せる。
そんな彼を見てあたしはクスクスと笑った。

「じゃ、洋輔呼びに行つてこよつか？」

「はい、お願ひします」

「うん」

藤井くんは目の前を横切つて、あたしの前にあるドアを開け、洋輔の部屋に向かう。彼を見送つたあたしはまたCafeに戻る事にする。

自動ドアが開いたと同時に店内のカウンターにいる大家さんが声を掛けってきた。

「起こせたかい？」

「今そこで藤井くんに会つたので、洋輔の事は彼に頼んじやいまして」

ペロリと舌を口から少しだけ出しあたしは、大家さんに笑うと、心なしかホツとしたような表情の大家さん。

「そうかい、それはよかつたじゃないかい」

「はい、じゃ空いてる席お借りしますね」

「ああ、どうぞ」

あたしは元居たカウンターじゃなく、歩道や道路が見える窓際にある4人席のテーブルに座る事にした。

席についたあたしは勉強セットを取り出し、洋輔たちが来るまで、高校で習つてた事を必死に思い出そうと頑張るのだった。自動ドアの方から、かつたるそうな男性の声がする。

第6杯　?

Cafeに入ってきたも会話が止まる事もなく、JUJUが来るようだ。

「もう少し寝かしてくれりゃいいのに」

「あんな、お前いい加減にしろよ」

「んな、怒んなくてもいいじゃなくね?」

「普通は怒るだろ」

寝癖のついた頭をボリボリかく洋輔に、呆れた様子の藤井くん。

「とりあえず、富野さんだつたかな、謝るんだぞ」

「へいへい、謝りますよ」と、その前に

「ひりひりに向かっていたのを急に進路を変えて、洋輔はカウンターのそばへ。

「コーヒー・ブラックでお願いします」

「いらっしゃい、洋輔くん、慎一くん。コーヒー・ブラックだね」

「同じので、俺もお願ひします」

「はい、かしこまりました」

用が済んだのか、ふたりはまたこちらに向かってくる。
洋輔はバツの悪そうにあたしへ話しかけてきた。

「董子」

「つん?」

「なんだ、その

待たせて悪かったな

「ホントおーにやつ思つてるの?」

「ああ、まあな」

「一応、洋輔も反省してるから、許してやって」

「まあ、いいけど。とりあえずふたりとも席に座つて」

あたしがそう言つと、ふたりは席に腰掛ける。あたしの隣には洋輔、彼の前には藤井くんと言つた形に。ふたりがそれぞれ、鞄から筆記道具を出していると、男性の声。

「ハイ」

その声にあたしたちが振り向くと大家さんじやなく、ガテン系の服が似合いそうな雰囲気の男性がいた。一見いかつそうな感じ。坊主よりかは少し髪が長めで、さっぱりとした髪型の30代前後の男性がカップをテーブルに置くのだった。

「哲太さん、ありがとう」

藤井くんが声を掛けたのに対し、短髪の男性は小さくうなづいた。次に洋輔の前にもカップを置く。

「サンキュー哲太さん」

また、小さく笑つただけで、何も言わずにカウンターに戻つて行く男性。彼が戻つたのを確認してから、あたしは口を開いた。

「あの人つてアルバイトさんですか?」

「ううん、大家さんの息子さんだよ」

「あれっ、董子は初めてだつけ」

「うん、見かけたのは今が初めてかな」

チラつと、哲太さんと呼ばれた男性を見るあたし。大家さんの息子さんと聞いて、あたしはどんな人物なのか興味が湧くのだった。

藤井くんはそんな様子に気が付いたのか、簡単に哲太さんの事を教えてくれる。

第6杯 ?

「確かに、夜中とか、Cafeにいる事が多いかな。とっても無口な人でね、あまり話をしているのを見た事ないな」

「ううう、俺はよくマス姉に絡まれてるのしか、見た事ないぜ」

「なんだ、それにしても大家さんと雰囲気がちがつなあ」

飲んでいたコーヒーを置いてから、テーブルにある参考書っぽいものを手に取る藤井くん。それをパラパラめくり、内容にて通じている。

「まつ話はそれぐらいにして、洋輔の勉強会始めよつか」

「ですね、あたしは何教えればいいのかな?」

「富野さんには、どんな感じに勉強するか、要領を掴んでもらってから、交代してもらおうかな」

「わかりました。とりあえず出番が来るまでは、あたしも自分の勉強しようかな」

「うん、それがいいよ」

「はい、わからない事があつたら聞いてもいいですか?」

「遠慮なく、聞いてくれていいよ」

「ありがとうございます」

あたしは藤井くんをみながら、軽く頭を下げて微笑んだ。

そんなあしたたちの会話に、洋輔は少しイライラしている模様。

「そのふたり、イチャついてないで、勉強教えるよ」

「全然イチャついてないから、ほら、洋輔はコレ解けるよ!」

「!」

「その前に慎一、この数学の問題の解き方教えてくれよ」

「「の前のか……」」
それは□□を×と考えて、yの値から出して計算
していけば

」

しばらくこんな会話が繰り返されながら、ヒントを藤井くんから
もらい、洋輔が数学の問題を解いていく。

本格的にふたりは勉強を開始し始めたのだ。

真剣なふたりをよそに、あたしも交代するまで、自分の勉強を見
直す事にした。講義で習った事を思い出し、ノートを見返しながら、
復習する。

時間が経過して、集中力をかくようになっていたあたしは、ガラ
ス越しに広がる風景を眺め始めていた。

「 天気悪いな」

「の」の一言で、どうやら、集中力をかけていたのは、あたしだけじ
やなかつたみたい。caf eのガラスの向こうに黒っぽい雲が広が
つてきているのを見たのか、洋輔がそうつぶやいた。

「そうね、崩れそうな 雲ゆき」

あたしが何気なく、ガラスの向こう見て言つた矢先だつた、透明
なガラスにポタポタと大粒の雨が降る。降り始めて、まだ所々にし
か、大粒の雨が打ちつけていないようだ。

「降つてるみたいだね もう」

藤井くんの言葉をキッカケに、いつそう激しく雨が街に降り注ぐ
のだった。

第7杯 大人の恋愛事情

「天気悪いから、店 ガラガラじゃなくね」

洋輔の言葉でCafeの隅々まで見わたした。誰もいないCafeはあたしたちの貸切状態。

この状態を田の当たりにして、あたしは苦笑するしかなかった。そんな洋輔とあたしの様子に、藤井くんが気を使つたようで

「ふたりとも、集中切れたみたいだから、休憩はさもうか

「ですね」

「次、宮野さん交代で大丈夫？」

「なんとか……やつてみます」

「うん、お願いするよ」

あたしたちの会話がまとまつてか、洋輔は立ち上がり身体全体を伸ばし始めた。凝り固まつてた身体をほぐしたかったみたい。席に座ると、今度はあくび。

「眠そうね」

「まゝな」

洋輔はそのまま上半身をテーブルに伏せ、虚ろな顔。それ以上話掛けんなって言われている様な気がして、あたしは藤井くんに話を振る。

「藤井くんは？」

「俺つ？ ちょっと疲れてるけど、大丈夫だよ

「富野さんは眠くないの？」

「今はそうだな　　お腹減ったかな」

「じゃ、なんか食べにでも行くかい？」

「あっ！　食事は大家さん用意してくだわるつて」

わたしの言葉に、ムクッと起き上がり、大声を出した洋輔。

「やつた——！」

周りにはお構いなしにガツンポーズをするから、わたしのところまで伸びた洋輔の腕が、当たり掛けるのだった。

「シ一聲大きい、あと、いきなり腕も伸ばさないで」

「悪い悪い、ついつい」

「ついついね……」

悪気なさそうな表情の洋輔を、わたしはひと睨みする。

あたしたちの不穏な空氣を察知したのか、急にしゃべり出す藤井くん。

「あ～、食事作ってもらえるんなら、助かるね、富野さん」

「えつ　ええ。そうですね」

答える為にあたしは藤井くんの方へ顔を向ける。そんな彼は洋輔からすっかり注意を自分自身に向ける事に成功したので、ホッとしている様子。

「じゃあ、どうじょうかな」

「あたし大家さんに言って頼んできますね」

「うん、そうだね。それがいいね、なつ洋輔？」

「あつああ。腹減つて集中力切れだしな

ふたりは示し合わせたよつこ、会話を進めるまるで、

相談でもしていたかのよつこ。

そんな彼らが氣の毒そつだから、洋輔の事は水に流す事にしてあげて、あたしはそのまま会話を続ける事にした。

「じゃあ、サンドイッチとか軽食類ですけど、何かリクエストは?」

「なんでもいいよ、俺は」

「俺も、なんでもオッケイ」

「はあーい。じゃ、頼んできます」

愛想よくふたりに返事をして、席を立つた。大家さんたちがいるカウンターへ移動する為に。

第7杯 ?

カウンターには大家さんの姿がない。休憩にどこか出て行ったか、奥にある部屋で休んでいるんだろうなと、そんな事を思いながら、目の前の”哲太さん”に仕方なく声をかける。

「食事お願いします」

「ああ、きいでいるよ」

「哲、なんでもいいみたいで」

話しかけた相手に、あたしは肩をすくめ、苦笑してみせたけど、話が続かなそうな雰囲気。

その雰囲気に耐えられなくなつて、あたしはカウンターを離れようか、と思つたけど、もう一度話しかけてみる。

「あ～あの　はじめまして、宮野董子です」

声に反応してか、作業中の”哲太さん”があたしをチラつと見る。

「ども、ココのオーナーの息子で、哲太と言います」

「お話は伺いました。ふたりから」

「そう……じゃ作業の続きいいかな?」

「あ、はい」

「できたら、テープル持つていぐよ

「はい、お願ひします」

ぎこちない会話を済ませたあたしは、ふたりの元へ、今度こそ戻る。

ふたりから感謝の言葉をもらい、そのままあたしは元の席に座つ

た。それぞれ食事が来るまで、思い思いに時間をつぶす事に。

洋輔はやっぱり寝る体制を取つてゐる。藤井くんは読書を始めたみたい。あたしはと言つと、本を読みながら、暇ついでにふたりを観察してみた。

ほんの少し時間が経つた頃、香ばしい匂いがCafeに漂い出す。いい香りに、本から田を逸らし話しかけて来た藤井くん。

「いい匂いだね」

あたしも藤井くんに応える為、本から視線を彼に移す。

「ええ、とっても」

「富野さんはどこの大学？」

「あたしは桜花女子短大」

「そう、講義大変だろ？？」

「そうなんです もつと、短大って楽なのかと思つてたんだけど」

「講義がぎつしりで大変らしいね」

「はい、思つてた以上に……大変で」

「いつも部屋で勉強を？」

「一応……講義の復習と予習をしてます。藤井くんは

「お待たせ……」

その言葉であたしたちの会話がさえぎられるのだった。目の前にはおいしそうな両面トーストしたパンで作られたサンドイッチ。それを持つて来たのは、作ってくれた哲太さんだ。

「ありがとう、哲太さん」

「ありがとうございます」

「ああ、頑張つて」

「はい」

サンディイッチのお皿を受け取った藤井くんはテーブルの各自座っている場所に、置いてくれる。

あたしは隣に寝ている洋輔を揺さぶり起こした。彼は起き上がり、口をこれでもかと言うぐらいに開けて、アクビした。

「……ふあ～あ」

アクビで眠気が飛んだのか、今度は窓の外を気にし出した洋輔。

「あれっ？」

第7杯　？（前書き）

小説の色変えてみようかと、思いました。
いきなりですが、独断と偏見でカラーテーマを変更します。
もし、気に入らない場合はどなたか、ご一報くださいね。

10 / 25 0700

第7杯 ?

「んっ、どうかした?」

「いや、あれ? マス姉じやなくね……」

洋輔は自身なさげに、外のある場所を見つめたまま軽く、その視線の先をあたしは辿るのだった。

あたしたちが Cafe の外を、田を細めてみる様子に、藤井くんはいぶかしげそうな声を出す。

「どうかしのかい、ふたりとも?」

「……ずぶ濡れで、歩いてる女の人�이て」

「どに?」

「慎一、後ろ……見てみろよ」

「たぶん、見間違いやないと思つ。あの服は

「

あたしがマス姉と確信すると同時に、ふたりもとても心配そつな声で話す。

「様子がおかしい、普通じゃなくね?」

「……確かに、様子がおかしいな」

ふたりも、大粒の雨が降りしきる外の様子を伺っている。

あたしは、なんだか心配になつてきた

元気がちょっとなかつたマス姉の事を思い出すと。

「

か、傘取つてくるね、あたし」

いてもたつてもいられず、あたしは既に、席を立ち、歩きかけよ

うとしていた。

そこへ誰かが、あたしの腕を掴んだ。

「つえ

？」

「……これ」

掴まれた腕の方を見上げると、ものすごく顔色の悪い様子の哲太さんがいた。心配そうな顔で、傘を握りしめている。彼の強い力で引っ張られたあたしの腕が、少し痛んだ。

あたしの微妙に引きつった顔の様子に気づいたのか、慌てて謝つてくれるのだった。

「あつごめん、俺

」「

「大丈夫です、あたしは……」

あたしがそう言つて少し微笑んだら、ホッとした様子で、あたしの腕を掴んでいた手の力が緩む。

哲太さんの方へ向きなおしたあたしは、彼の手から傘を受け取るのだった。

「傘……使いますね」

「ああ

今だ、不安そうにしている哲太さん。あたしはそんな彼をおいて、急いでハイツの出口へ行く。出口を出ようとハツと息を呑む。

暗い雨の中、車のヘッドライトが、目に飛び込んだ。目が眩むほど、それは眩しく、思わずまぶたを閉じた。

それまで、まぶたを開じていたのを、車のブレーキ音と共に開ける。

「待ってくれ、ますみ」

「ここへは来ないでつて、言つてあつたでしょ」

岡島ますみと男性が、あたしの目の前でもめている。男性は車から顔を覗かせていた。言い合いに拉致が明かないと思ったのか、そのまま走り去つて行つた。

第7杯 ?

出て行くべきなのか、迷う。今、あたしが出て行つたら、どんな顔をするだろう、という思いがよぎつた。

あたしなら みられたくない、と思つだろう。それなら、何も見なかつた事にして、戻るべきかもしれない。そう思い返してから、ハイツへ知らぬ間に戻つていた。

あたしがCafeの入口を、開けた途端に、洋輔が怒る。

「トウコ、なんで、戻つてきたんだよ」

「今は行かない方が、いいと思ったから」

「なんだよ、それ」

「いいから、元の席に戻ろ」

怒つたままの洋輔の腕を掴み、あたしは、グイグイと彼の腕を引つ張り、自分たちの席に戻つた。

あたしたちが戻つて来た事に、藤井くんは不思議そうな表情。

「どうかしたの、ふたりとも？」

「俺もよくわからんね」

洋輔は彼にそう答えてから、あたしを冷たく見る。彼の視線の冷たさに耐えられそつもなく、さつきと同じ事を言つしかなかつた。

「行かない方が……いいと、思ったの」

あたしの言葉に理解できずにいる彼ら。ふたり分の視線があたしを責めるのだった。

そんな中、Cafeの入口を見て、オロオロしている哲太さんが、あたしたちの目に映る。視線の先をあたしたちも、息をとめては見入った。

雨の中、マス姉はやっとの思いで、ハイツの入口の扉を開けていた。彼女の頬には涙が、こぼれている様にも見えた。

それが雨のせいなのかは、ここにいる全員
わからなかつた。

誰も動く事ができずにいる。あたしも含め、みんなマス姉の事も、見つめる事しかできなかつた。

「普通じゃなくね？」

張りつめた空気の中、口を開いたのは洋輔、それに藤井くんが、落ち着いた様子で答える。

「ああ、普通じゃないね」

「そうね、今日はそつとしておいた方がいいと思つ」

あたしは顔を伏せ氣味に、誰とも視線を合わせないようにした。藤井くんはあたしの様子に、気が付いたのか、優しい言葉を掛けてくれる。

「何があつたのか、教えてくれないかな？」

「あたしが、勝手に話すのは」

「わかつた。何も話さなくていいよ」

「……ごめんなさい」

あたしは藤井くんの優しい気遣いに、なんだか申し訳ない気持ち

でこつぱこになつた。

第8杯 指に光るモノ

「なんだよ、それ。全然意味わかんなくね?」

洋輔がまだ納得できていなくて、あたしはまた困惑する。

「これ以上聞くと、富野さんが困るから、やめておこう」

しつこぐする洋輔を、藤井くんが制止してくれる。

「様子が変なのは、明らかなのに、か?」

「ああ。様子がおかしいのは明らかだけど、富野さん、問い合わせても仕方ないだろ?」

「そりやそうだけど

」

洋輔はポリポリと顔をかくと黙り込んだ。

誰もそこで口を開かなくなる。

重ぐるしい沈黙をあたしが破つた。

「もし、降りてきたら、いつもの感じでいいと思うの」

「それがいいだろ? 何か悩んでるんなら、本人の口から言つだらうしね」

「……うん」

「まつ他人にあれこれ聞かれるのは俺も嫌だからな。もうなんもきかねえから」

あたしたちが相談の真似事をしていると、スーツを着た男性がCafeに入ってくる。

「いらっしゃいませ」

ハンカチで顔を拭いている男性に、カウンターから、哲太さんが迎えた。

Cafeをあちらこちら見ては落ち着かない様子の男性。大人の男性とは程遠い行動の末、席を決めたのか、テーブルに座る。

「ご注文は？」

「あつ……その

」

せっかく座ったのに、スーツの男性は、哲太さんのいるカウンターに向かつた。

咳払い自分で自分を落ち着かせる男性。

「上のハイツの住人の方と話がしたいんだがね？」

「失礼ですが、お客様は？」

「岡島ますみの上司で、忘れ物を届けに来たんだがね」

「では、こちらでお預かり致しましょうか？」

「いや、本人に渡したいんだ」

「わかりました。では少しお待ち下さい」

「ああ」

男性は来た時とは違って、とても落ち着いた様子。用が済んだのか、自分が選んだ席に腰掛けた。

ふたりのやり取りが、所々、自分たちにも聞こえたので、みんなお互いを見て目配せする。

「あいつ誰だろ？」

「さあ、誰だろうね」

洋輔と藤井くんのヒンヒソ話にあたしは参加せずについた。

あたしの背後に哲太さんがいつの間にか立つて、何かボソボソと言っている。彼が何をさせたいのかを理解した。

「お願いするよ」

あたしが無言で、頷くのを見た哲太さんは、カウンターに戻るのだった。

「今のはだつたんだ?」

「どうかしたのかい?」

「なんでもないの」

「

哲太さんの行動で、ふたりが動搖しているみたいだから、左右に首を軽く振つて、冷静にあたしは応えた。

「あつあたし

「

「急になんだよ?」

急にあたしが立ち上がるビックリしたよつで、洋輔は口ひりを見上げている。

「うん、ちょっとね」

あたしがそつと、納得してくれたのか、洋輔が席から出やすくしてくれる。

「戻つて来るのかい？」

藤井くんもあたしを見上げた。彼の視線はあたしの荷物をせしている。

「戻つてくるので、少しの間、荷物お願ひします」

黙つて藤井くんはうなずいてくれるのだった。

あたしは安心して出入口の自動ドアへ。哲太さんに頼まれた事を実行する為、一度Cafeを出た。

ハイツの上に上がる扉を手早く鍵で開けてから、3階まで急いで駆け上がる。3階の岡島ますみと書かれた表札の前で、あたしは息を落ち着かせた。

そして、インター ホンを鳴らす。チャイムが鳴った後にインター ホンに話しかけるのだった。

「あの、マス姉、もう帰つてきてる?」

「何?」

「今、下のCafeに来れるかな?」

「……どうして？」

「マス姉の会社の人が来てて、何か渡したいらしくって……」

「それって、30代くらいの男性？」

「そうだよ」

「なら、帰つて貰つて」

「でも、大事なものだつて」

あたしの言葉を最後にマス姉は何も答えてはくれない。

5分くらいあたしが下に帰ろうかどうじょつか迷つていたら、インターホンからマス姉の声がした。

「……わかつた、行くから」

「じゃ、あたしは先に降ります」

インターホンからはガチャつと音のみが聞えるだけだった。

あたしがCafeに戻ると、ふたりが心配そうにひやりを見ている。

哲太さんに降りて来る事を伝えて、あたしを不思議そうに見つめる彼らの元に戻った。

「お帰り」

席に座つたあたしに藤井くんが何気に声を掛けてくれる。

「……ただいま」

「呼びに行つたのか、マス姉を？」

あたしや哲太さんの行動をみて洋輔は気が付いた様子。

「…………うん」

「なんか、おかしいと思ったよ。トウコも哲太さんも「ソソソソするから」

「「ココは何も聞かないでおいづ、洋輔」

意味あり気な目であたしを見る洋輔は、藤井くんの言つた事をすんなりと納得した模様。

「わかつたよ、慎一」

ふたりの会話がちょうど、終わつた時、cafeの自動ドアが開いた。

そこから、少し疲れた様子のマス姉が姿を現すのだった

スーツの男性が彼女に気づき、ハツと立ち上がる。

「ますみ……」

何も言わないままスーツの男性へ静かに近づくマス姉。
彼も近づいて来る彼女に歩み寄る事もなく、テーブルに座り込んだ。

「…………には……ないでつて」「なつなにつ？」

男性のテーブルまで来たマス姉は何か怒った様子。彼女が言つた言葉が、聞き取りづらかったのか、彼は困惑している。

マス姉の名前を彼は緊張ぎみの声で呼ぶと彼女の顔色をつかがい見た。

「ますみ？」

あたしたちにも緊張が伝わってくると、そこのいる誰もが息を呑むのだった。

第8杯　?

岡島ますみは自分を一度落ち着かせようと、息を吸い込んだ。そして、その効果が出たのか、言葉が鮮明に聞える。少し離れたあたし達にも聞き取れるくらいだった。

「なぜ、ここに？」

「君と話をちゃんとしたいから、来たんだ」

「ここへは来ないでって言ったわよね」

「……ああ

「お互いのプライベートな領域には、踏み込まない、約束の、はず」

「ああ　でも、今はここにいる」

「あなたとは、いい解決策は話えない」

神経がまいっている様子のマス姉は、テーブルから離れ去りつつとする。その時、男性が引きとめた。

「愛しているんだ、ますみ

「久賀さん……放して」

「いや、放さない。君が僕の話を聞くまでは」

マス姉に“久賀さん”と呼ばれた男性は、力強く彼女の腕を握つたまま、放さない。黙つたまま、何も言わずふたりは見つめ合いつただつた。

「あれ、見ろよ」

洋輔がそう言つて指さしたのは、今にでもカウンターを飛び越え

そうな哲太さんだった。

あたしの目から見ても、彼はふたりの様子に、動搖しきっている。

哲太さんもあたし達も、みんなふたりの様子を見ているしかなかつた。

「ますみ、座つてくれないか？」

“久賀さん”は冷静にマス姉を席につながし、座らせる。

「コレ、忘れたろ」

そう言つて取り出したのは女性物の雨傘。
無言でそれを受け取るマス姉。

「頼むから、そんな態度を取らないでくれないか？」

「この状況でどんな態度をしろって、言つの？」

「普通のだよ、冷静に話そう」

「今までどれだけ、あたしがあなたに……」

マス姉の言葉が途切れ、それ以上話を続けるのに戸惑つてている様子。

戸惑いは“久賀さん”を想つてなのか、この場にあたしたちがいるかなのかはわからない。

冷静な表情の“久賀さん”は、そんな想いを無視して、話の先をうながす。

「あなたに、その先は？」

「何度も、辛いおもいをさせられてきた」

「もうわかった……よ」

「あなたはあたしを愛してない」

少しづつふたりの感情がたかぶるのが、あたし達にもわかつた。ふたりの声がどんどん大きくなっている。

「どうして、わかってくれないんだ」

「じゃなきや、こんなにあたしを苦しめられる訳ない」

「今までうまくやってこれたじゃないか」

「よしてよ　もう、疲れたのよ」

「なぜ、今になつてなんだ?」

「あたしも、自分の人生を歩きたいの」

「もう、歩いているじゃないか?」

「いいえ、あたしがあなたと一緒にいる限り無理よ

「君なしで生きていけど……」

「今更、よくもそんな事をヌケヌケと言えるわね」

久賀さんに対する嫌悪感が増したマス姉。涙ぐむ目から涙を流さないように必死にこらえている。

ふたりの今の会話だけじゃ、あたしたちには、事情がまったくのみ込めないのであった。

「お互いわかっていたはずだろ?」

「わかつていた?」

「ああ、大人の付き合いだろ」

「本気で言つてるの、それ?」

「今さら、なんなんだよ」

“久賀さん”の悪態をつく姿を見て、心底マス姉は落胆している。今までの憤りの限界が達したらしく、いつの間にかふたりのいるテーブル前に哲太さんが立つていた。

「あんたなあ、ふざけるなよ!」

哲太さんは座っている“久賀さん”的首根っこを勢い良く掴んだ。突然の事に驚き慌てふためく“久賀さん”的姿は、本当に怯えている様。

「あれ、止めに入つた方がいいんじゃないかな?
いいじゃなくね」

藤井くんがそう言つたのを、涼しい顔で即答する洋輔。

ふたりのやり取りを見ていたが、あたしは何も言えずにいたのだった。

まだ、視線の先には首根っこ掴んだ哲太さんの姿がある。そんな彼に“久賀さん”は怯えながらも、反論する。

「なつなんだ君は。き、君には、関係ないだろ?」

「関係なくても、ますみさんを悲しませる奴は」

ふたりの男の間にマス姉が割つて入る。

「お願い、哲太」

“久賀さん”をかばうマス姉のすがる顔が、哲太さんには切なすぎる、まともに見る事ができない。彼は腰砕けになつた“久賀さん”の首から力なく手を放した。

「つたぐ、この男はお前に氣があるんじゃないのか?」

「そんなんじや、ない」

「なら　寝たのか?」

“久賀さん”的言葉に再度頭に血が上つて、りんごのよつに真つ赤な顔の哲太さん。

「こいつっー」

哲太さんが殴り掛けたのを、マス姉がもう一度止める。

「やめて!」

「こんなすぐ暴力をふるう男、どうせ^{がく}学もないんだろ」

「今、そういうのは関係ないんじやない。それに哲太とは寝てなんかない」

「だらうな、君には不似合だ。こんな暴力男」

ネクタイを締めなおした久賀さんが、クズでもみるよな目を哲太さんに向けた。

「君は引っ込んでくれないか」

哲太さんの肩を手で押しのける。そして、視線をマス姉に移すのだった。

「やっぱり、僕の事を愛しているんだろう。だから、かばってくれたんだろ？、ますみ」

そう言つて、マス姉の肩を抱き寄せようと、“久賀さん”は腕を伸ばす。ところが、彼女はその腕をスルリとかわした。戸惑いのせいなのか、彼の顔が少し険しくなる。何も言わずただ黙つたままジツと彼女を見るのだった。

マス姉はそんな“久賀さん”を見ずに、荷物を彼に押し付ける。

「はい、コレ。もう 十分でしょ」

納得できない“久賀さん”は皮肉交じりに鼻を鳴らした。

「フン。よく……わかったよ
「なら、もう用はないでしょ」

マス姉はCafeの出口の方に腕を伸ばして、口から出て行く事を、“久賀さん”にうながす。今度はしっかり、彼の顔を見据えるのだった。

観念した様子の“久賀さん”は無言で歩く。その後ろにマス姉がついて歩く。ゆっくりと出口に向かうが、急に彼がピタッと歩みを止める、出口の前で。

「ああ、そうだな。こんな気配りのない店員とほとんど客がいなくて、薄汚い店には用はないね。言っちゃなんだが、出されるコーヒー

「もまああつだ」

自動ドアが開いて、何かが、自動ドアの向いにある壁に勢いよく吹っ飛んだ。

第8杯　?

壁際で男は突然に訪れた思わぬ報復に驚いた。

「なななな何、するん、だ」

殴られた顔が痛いのか、男はその場でのたうち回っている。ふたりの近くにいた哲太さんも、離れた場所にいるあたしたちも、その瞬間、何が起きたのか、理解できなかつた。

マス姉は吹っ飛んだ“久賀さん”に、ソッと手を伸ばす。彼はその手を無防備にも掴もうと、左手を差し出した。困惑する彼の左手のひと指しゆびから、鈍く光るモノを取ると、彼女はハイツの出入口から、力いっぱいどこか遠くへ投げる。

それは車のヘッドライトに反射して、ピカピカとキラメキながら、暗闇の中に消えていくと共に、ドスのきいた声がするのだった。

「ざつけんなつ、クソ野郎おおおおおお！」

何かをずつとこらえていた怒りの声は、マス姉のものだ。

「ままま、まさか……ますみ、ききき君が
ほほ僕を？」

「そうだ、あたしが殴つた」

やつと理解をした“久賀さん”は、へたり込んだまま動けそうにもないようだ。

「あたしの事はいい、でも……哲太の事や、彼が大切にしてる物を侮辱するな」

マス姉をまるで、初めて見たかのような表情をする“久賀さん”。何も言えずに、無駄に呆けているだけで、まだ奮い立てそうもないようだ。

「もひ……」「」へは、本当に一度と来ないで

“久賀さん”は黙つたままだ頷く。間を置いてから、ゆっくりと床に手を突き、立ち上がる。それから、左の人差し指のあるモノを探す為か、たする様に触れるのだった。

「ほ、ほ僕のゆゆゆ、指輪、は」

「……探せば

「

マス姉が冷めた眼差しで言い放ち、ハイツの外の暗闇を指差す。そして、自動ドアをぐぐり入ると、1ミリの隙間もなく、自動ドアは何事もなかつたように閉まる。彼女はガラスドア越しの“久賀さん”を黙つて見つめる。

“久賀さん”はクタクタになつた服のような足取りで、力ないヨタヨタした歩き方で、Cafeから去つていくのだった。

あたしたちのCafeから、こうして“クソ野郎”は消えて居なくなつた。視線の先にはマス姉と哲太さんのふたりだけが残つた。

「ますみさん、俺……」

哲太さんはマス姉にそれ以上何も言えずにいる。それは自分だけが潤んだ彼女の瞳を見たからだった。

「これで、おしまい。何もかも終わつたんだら、んな顔するなつて……」

だか

複雑な顔をする哲太さんに、マス姉が強がってみせる。無理に笑つた彼女の顔を見て、とても苦しそうに自分の胸のあたりの服を、彼はギュッと握り締めるのだった。

第8杯　？（後書き）

この第8杯はこれで以上になります。

第9杯 季節ならではの計画

「「」の前はす」「かつたよな、マス姉」「だね、あたしもビックリしちゃったよ」

Cafeのカウンターで洋輔とあたしはふたり、この前の事件の事を話していた。

「ああ、まさかのパンチだつたよな、俺はスッキリとした気分になつたぜ」

洋輔は興奮したのか、ボクシングをするみたいに両腕を構え始めた。右手と左手を握ると、拳をつくる。それを片方だけ、何もない空間に突き出すと彼は得意気に殴つて見せるのだった。

「あたしも。殴られたあの人には、氣の毒だけどね」「そりか？ あれぐらい当然だつて思うけどな。俺的には」

満足げな顔の洋輔。そんな彼には悪いが、あたしは他に気がかりな事があった。

「それよりさ、あれから少し元氣ない気がする、マス姉」「確かに、あれから空元氣つて感じだな」「余計なお世話かもしれないけど、なんかできる事ないかな？」「できる事つつても、なんもないんじゃなくね」「うーん」

思い悩むあたしの口からは、思わず声がこぼれた。そして、自分の頭で考えていた言葉が自然と口から出る。

「今の時期で誘つても、不自然じゃないものつて」

「今、桜が見頃ですよ」

洋輔以外の男の人の声がした。視線を洋輔から声の主に変えるたし。

視線の先はもちろん大家さん。

大家さんがCafeの外の桜に視線を送つて、あたし達にソッと教えてくれる。

外にある桜は通りに何本か植えられていた。その8割程が開花している。薄つすらと桃色に色づく桜は、確かに見頃を迎えていたのだ。

「そつか 桜か……」

「それなら～、夜桜なんていいんじゃなくね？」

「確かにお花見なら、全然大丈夫だよね」

「ああ、そうだな」

洋輔との会話が終わると素晴らしい計画のヒントをくれた大家さんを見る。あたしの視線を感じたのか、大家さんは用事を一瞬止めて、こちらを見て微笑んでくれる。なんだか、心が通じたみたいであたしも嬉しくなるのだった。

そして、こちらに来る大家さんへ、あたしも微笑んだ。

「さすがですね、大家さん」

「いえいえ、今の時期ならではの事なら、桜が一番いいですよ
「ですね」

大家さんは忙しいのに、仕事の手を止めて、あたしの所へわざわざ一声掛けてくれる為、来てくれたのだ。話が終わったら、また自

分の仕事に戻つて行く。再度、用事をこなし始めた。

第9杯 ?

会話が終わってからあたしが横を見ると、隣の洋輔も同じ様な顔をしている。

それは安堵したような表情だった。

「これで決まりだな」

「うん、でも夜桜にしても、桜のゆっくり見れる所、知らないなあ

「あそこはどうよ?」

「あそこって、どこ?」

「この近くに川があんだけど、そこは夏なら打ち上げ花火あげたり、桜なら何本か植えてるのを見かけた事あるぜ。それに夏以外なら、比較的にプライベート空間にも近いしな」

「あたしが、求めてる場所にバツチリじやん

「だろ?」

「うんうん。でもそんな所、今空いてるかな?」

「大丈夫、そこより、めっちゃでかい公園があつて、そっちの方に地元の人間なら、お花見に行くよ」

「なるほどね。やるじやん、洋輔」

「この俺を誰だと思つてんだよ」

洋輔がどうだ、と言わんばかりのドヤ顔を披露した。だから、あたしもそんな得意そうな彼をシラッと受け流す。

「ただの生意気な高3、でしょ」

洋輔は肩透かしを食いつてか、あたしの田の前で、見事にズッコケる姿を披露してくれる。

「んだよ、それ」

「だつて、他になにがあるのさ？」

めんべくやそうに答えたあたしをよそに、洋輔は納得できないみたいだ。

「そのまんまじゃなくね？」

「あんたには、それで十分だよ」

あたしはそつとクスリと笑うのだつた。

「えらい言われようだね」

そう言つて、こいつとほほ笑む藤井くん。
あたしたちが振り返ると、そこにバイトから帰つて来た藤井くんの姿があつた。

洋輔は藤井くんへ、声を出さず、あたしへの文句を態度で表すが、
彼は見て見ぬふりをする。
あたしはそのお調子者の隣から、改めて藤井くんに声を掛けるの
だつた。

「藤井くん、バイト終わつたの？」

「ああ。やつとね」

「お疲れ様でした」

藤井くんは肩をほぐしながら、あたしの隣の席に腰掛ける。
洋輔もあたしと同じ様に、疲れ切つた藤井くんをねぎらつた。

「お疲れさん。慎一、勉強とバイトの両立はきつくな？」

「ああ、そうだな。お互に疲れるな」

洋輔も藤井くんも背が高いから、あたしを挟んで会話も楽々らしく、あたしの頭上で、遠慮なくふたりの会話が繰り広げられる。

「次は、バイトいつなんだ?」

「なんでだい?」

「いや、勉強の方みてほしくてな」

真面目な顔の洋輔がそう言つと、藤井くんは何かを考えている様。その隙にあたしも彼らの会話に参戦する事にした。

「大変なんだね、ふたりとも」

あたしの言葉に、洋輔が誰よりも先に反応した。

「まあな、どつかの誰かとは違つて、俺も慎一も大変なの」

「へへ。それはそれは、どつかの誰かとは、誰の事なんだろうね?」

「さあ~俺の口からは言えないねえ」

「あつそ。あたしもどつかの住人に迷惑かけられて、大変なんだよね」

あたしの態度に、どうやらこれ以上は話さないほうがいいと悟つた洋輔は、口をつぐんだ。

洋輔があたしにしてくれた事を思えば、今は黙つといた方が賢明。でも、少しいじめすぎたかな、と感じる自分もいた。あたしはちょっとぴし大人気なかつたと、少しだけ反省するのだった。

相変わらずなあしたちふたりの会話には参加せず、藤井くんは会話が終わつたのを見計らつてから、話し掛けてくれる。

「そう言えば、険悪になる前のふたりは何を話し、してたわけ?」

藤井くんに痛い所を突かれたあたしも洋輔も、お互いの顔をチラツと見ていた。様子をうかがうのだった。

少しの間を置いてから、洋輔が先に口を開く。

「……安心しろ。俺たちほんの5分前は、ちゃんと会話できてたぜ」「それは、よかつた。もつと皮肉のオンパレードで、会話にならな

い会話してたのかと、思ったよ

藤井くんにしては珍しく毒づいた。その後、彼があたしたちに視線を送ると意味あり気に、あたしと洋輔を見入るのだった。あたしはそれで藤井くんが何を言いたいのか、なんとなくわかつた。彼の期待に応えるべく、声を出す。

「言いたい事はわかつたよ

藤井くん

「じゃ、僕が来る前の仲良く会話してた事を、教えてくれるかい？」

そう言つて皮肉る藤井くんは、あたしだちへ微笑んだ。

そして、優しい笑みを浮かべた藤井くんが、今度はあたしだけを見つめる。

「ええ、喜んで」

あたしは藤井くんの何とも言えない眼差しに観念して、苦笑してから、マス姉の為の計画を打ち明けた。

あたしが話しこると藤井くんは賛同してくれたのだった。

「それいいんじゃないかな、気分転換になるだらうしね」「だろ、慎一」

洋輔があたしの代わりに、「満悦な顔をして答えた。

藤井くんの賛成で、あたしは勇気を出し、もう一つの話も切り出す。

「それでよかつたら、時間ある時にでも、お手伝いしてもらひたい

「ありがたいかな」

「ああ、いいけど。何かする事あるのかい？」

藤井くんの疑問にあたしが答える間もなく、洋輔が便乗する。

「そう言えば、まだ、なんも決まってなくね？」

「うん、それを今から考えないと」

「場所と、コンセプトの夜桜が決まってるって事は

「

洋輔の言葉が途切れ。そして、少しの間考えてから、何かひらめいた様子。

第9杯 ?

「月並みだけど、花見だから、料理とか出して、皿で盛り上がるのがいいんじゃなくね？」

「お料理はもちろんだけど、重箱か、BBQとかね。どんなのがいいかなって」

「どちらも捨てがたいよな」「でしょ?」

あたしと洋輔が意氣投合する中、藤井くんの反応も知りたくて、彼を見た。

すると、藤井くんが乗り気じゃないような態度のよっこもみえた。

「うーん よかつたら、料理は俺にまかしてもいいえるかい?」「ええ。料理得意なの、藤井くん?」「あー、……心辺りがあるから、その人に作つてもいいつけ」「じゃあ、お願ひします」
「洋輔とあたしは、どうしようか?」「 そうだな」「 そうだな」

再び悩むあたし達を見て、横から、藤井くんが洋輔を呼ぶ。

「洋輔は料理の材料や色んな物を運ぶ、力仕事を頼むよ」「了解。んじゃ、トウコはどうするんだ?」

藤井くんが洋輔にあたしの事を指摘されるとあたしの役割を考える。

「そうだな

」

「俺らだけじゃ、しぃどこいつ。トウモロコシもおひるもひいてもよ
くね？」

「あたしも、役に立てると思うけど」

「いや、富野さんにはマス姉以外の人のスケジュールおさえてもら
うと助かるよ」

「〇〇。でも、あたしが言つたの、その仕事だけでいいのか
な……？」

快くは返事したもの、やつぱりしぶしぶに落胆する。や
れにふたりに悪い氣もした。

「……、富野さんにはマス姉にはバレないよつて、連れ出しても
う、重要な仕事が控えてるんだから」

「そつか わづだよね。一番重要だよね、それが

藤井くんは納得したあたしを見てから、ホッとしたような表情で
穏やかに笑ってくれた。

「ああ、やつや。洋輔も僕も男だからね、しんどい事は任して
くれよ」

「んじや、皆太さんも巻き込んでじやおつせ」

新たに洋輔が自分の提案を藤井くんへ述べた。彼の提案に真っ先
に乗つたのは、このあたしだった。

「だね、きつと飛んで来てくれるよ
「だろ？」

洋輔もあたしも気持ちがかみ合って、やつと自然と笑顔が、お互
い溢れ出るのだった。

あたしたちふたりの様子を見守る藤井くんはにこやな表情を浮かべる。

「ふたりともわかったよ。じゃあ、そのつもりで夜、哲太さんに声掛けておくよ」

今日はあたしたちのちょっとしたケンカもマス姉の計画も、藤井くんに全て丸く收められた。彼は洋輔と違つて、頼りがいがある人だというのがよくわかつた日。そして、あたしにとつて、藤井くんという人間を知る貴重な一日なつたのだつた。

第9杯　？（後書き）

今年の更新はこれで終了です。

皆様よいお年を。また来年お会いしましょうね（^ ^）ノ

新年は1月8日～13日前後に開始できればと想っています。

第10杯 桜舞い散る、うたげ

「マス姉と一緒に例の場所へ、約束の時間においでよ」

あたしは藤井くんが、そう携帯の向こう側で言っていたのを思い出した。自分の部屋からCafeに降りると店内にはマス姉の姿はない。どうやら、先にCafeに降りてきたのはあたしのようだ。彼女はまだ降りてきていみたい。

あたしは大家さんが入れてくれたコーヒーを、カウンター席で味わいながら、待つ事に。

飲んでいたコーヒー カップを置いた瞬間、接客の合間に大家さんが話しかけてくれる。

「今日は楽しんでおいでね」「はい」

大家さんに声を掛けられて、フツとあたしは思い出した言わなきやいけない事があつた事に。

「あつそうだ」
「どうかしたのかい？」
「あ、いえ。特にあるわけじゃないんですけど」「なんかい？」
「えつと 哲太さんの事なんんですけど……」
「ああ、哲太の事かい」
「はい、迷惑じゃありませんでした？」
「いや、彼も楽しんでいるようだし、張り切つていたよ」「深夜の営業までには戻れるよ」
「その事なら、気にせず今日はとことん楽しむといいよ」

「はい」

この会話で心のつかえもなくなったので、あたしは大家さんに今度は満面の笑みで返事をしたのだった。

「「めん、「めん。待たせた？」

Cafeの自動ドアから、そう言いながら現れたのは、マス姉。目の前の彼女は少しばかり息ぎれしている模様。

「そんな事ないですよ」

「そつ？」

「さつさき、来たばかりですよね？」

「ううだね、5分くらい前だつたかね？」
「それくらいですね」

順調順調つと、あたしが思つてゐる中、最後にこのセリフを大家さんが言つてくれれば、完璧なシナリオができるが、

「ああ、そうだ。おふたりに洋輔くんから伝言があるんだけど、この近くの川の土手の下に来てほしつて」

あたしがグッジョブつと、言いたくなるくらいのグレートな仕事をしてくれた大家さん。

後はあたしの番だ。

思いもしない言葉にマス姉は少し考えている模様。

「なんだろうな？」

「さあ」

あたしが首を白々しく傾けて、考える仕草をあたしもマス姉に見せた。

大家さんとあたしたち、ふたりの演技は少しわざとらしかったかな、と思つたけど、マス姉にはそうでもなかつたみたい。

「なんかわからないけど、行こつか

あたしは句も言わずに軽く顔を縦に上下するのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0387q/>

~ Cafeハイツへようこそ！ ~

2012年1月13日20時57分発行